

2019年度

「学生による授業評価アンケート」

# 報告書

立教大学

2020年 9月

これまでに発行した『学生による授業評価アンケート報告書』は、大学教育開発・支援センターの Web サイトより閲覧いただけます。下記 URL または QR コードへアクセスし、「刊行物・情報公開」から「学生による授業評価アンケート報告書」を選択してください。

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>



## さらなる教育の向上の実現に向けて

総長 郭 洋春

本学における「学生による授業評価アンケート（以下、アンケート）」は2019年度で16年目を迎えました。この間、多くの教職員の皆さんの努力により改善が重ねられ今日に至ることができました。ここに感謝する次第です。今では当たり前のように行っている授業評価アンケートもここまで定着するには、多くの教職員のご理解とご協力があったからです。

アンケートの目的は、個々の教員による授業を学生がより充実した環境の中で学修を進めることで、大学としての教育力がより一層効果的に機能することを目指し、結果として学部・学科の教育力をも増進させることにあります。この目的に基づき、2004年度から2006年度までの3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」を原則として実施してきました。これにより、教員個人への教育に対する意識が高まり、授業改善の効果の向上につながったことが、各項目の数値から明らかになりました。

一方、2020年度からは、全学のFD活動をより推進するために、教務部の協力を得ながら、大学教育開発・支援センターが中心となってFDプログラムの企画や、アンケートの企画、データ集計・分析を担うことになりました。具体的には、2019年度第2回教育改革推進会議で2021年度からのアンケートをweb化にするとともに、設問内容の一部を変更し2020年度にパイロット調査をやることにしました。しかし、今回の新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年度春学期に開講されたすべての授業がオンライン授業となり、従来のマークシートでのアンケートができなくなったため、2020年度第4回教育改革推進会議において、2020年度秋学期のアンケートからweb化、および設問の一部変更を前倒しで実施することとしました。

先生方には、オンライン授業という今まで経験してこなかった新たな授業運営をお願いしたばかりでのアンケート実施となり、さまざまにご迷惑・ご負担をおかけすることになり、大変申し訳ない気持ちでいっぱいです。しかしながら、学生の学修意欲の向上・継続と大学として教育力のさらなる向上のため、なにとぞご理解・ご協力を頂ければ幸いです。特に、コロナ禍で新たな教育の在り方が求められている中、2019年度の授業評価を生かしながら、改善していくことは極めて重要かつ意味のあることであると考えます。

本学はこれまでも、そしてこれからも高い教育力の実現に向けて努力していく必要があります。そのためにも教職員が一丸となって、教育力の向上のために邁進していきたいと思っております。



# 目次

## はじめに

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
1-5 回答結果の全学的な活用に向けて	5
2. 授業評価アンケートの実施概要	6
2-1 実施方式	6
2-2 設問項目	6
2-3 各学部等の科目選定方針	10
2-4 実施科目数	10
2-5 実施期間	11
2-6 回答者数	11
2-7 「所見票」の公開	11
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	12
3-1 科目担当者	12
3-2 学部等	12
4. 学部等総評	18
4-1 文学部	19
4-2 経済学部	22
4-3 理学部	25
4-4 社会学部	27
4-5 法学部	30
4-6 経営学部	33
4-7 異文化コミュニケーション学部	37
4-8 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター	40
4-9 観光学部	43
4-10 コミュニティ福祉学部	46
4-11 現代心理学部	49
4-12 全学共通カリキュラム運営センター	51
4-13 学校・社会教育講座	59
5. 2019年度のまとめと今後の展望	62
6. 2019年度集計データ（資料編）	64
6-1 回答者数・回答率	64
6-2 全学集計	65
6-3 学部等別平均値	69



## 1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における「学生による授業評価アンケート」は、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

### 1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

## 1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が1-1で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方針を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。

### 1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.15参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメ

ントを通してその内容を明らかにすることを求める。

- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした\*。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

\*現在は Web のみで公開

(以上、2004 年度報告書より抜粋)

#### 1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は 2004 年度にスタートし、2006 年度までの当初 3 年間は「講義科目を対象に 1 教員 1 科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことからも明らかである。

2007 年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008 年度、2009 年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、「学生による授業評価アンケート」開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006 年度には、「1 教員 1 科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた(2007 年 1 月 25 日、部長会)。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議

を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1教員1科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

基本方針決定以降の、科目選定方針は以下の通りである。2010年度は定められた基本方針に拠って、実施する初年度となり、上記②の「1教員1科目」の原則により実施した。

- ・2010、2013、2016、2019年度：「1教員1科目」
- ・2011、2012、2014、2015、2017、2018年度：「学部等の必要性に応じた選定」

なお、2019年度の各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針（p.10）」を参照されたい。

### 1-5 回答結果の全学的な活用に向けて

本学は、従来、1-1に記載した目的に沿い、「学生による授業評価アンケート」の集計結果を教員個人の授業改善や、学部等によるFDの基礎資料として活用してきた。しかし、回答データを計量分析し、全学的なFDに活用するには至っていなかった。

そこで、2012年度10月に発足した大学教育開発・支援センター教学IR部会では、2015年度に2013年度の回答データを用いた分析を実施し、「教員の授業に対する工夫や努力、たとえば、各回の授業内容を明確に提示するよう意識するなどの取り組みによって、学生の授業や学習に対する意欲は高められる」という知見を得、教育改革推進会議を通じて全学へ報告し、共有した（詳細は、2015年度報告書に掲載）。

上述の知見を踏まえて、2017年度に行われた第1回「立教大学 教育活動特別賞」の選定にあたっては、2016年度授業評価アンケートの一部の項目の集計結果を各学部等へ提供した。各学部等からの候補者の推薦を受けて、最終的に34名の方々に賞を授与している。

2018年度は、受賞者の教育に関する優れた取り組みを共有するために、全学のFD活動としてシンポジウムを開催した。

そして、2020年度からは、このような全学のFD活動をより推し進めていくために「学生による授業評価アンケート」の運営主体について、全学教務委員会の下に組織されていた「学生による授業評価アンケート」実施委員会を廃止とし、全学を対象としたFD・調査を担う大学教育開発・支援センターが中心となり、教務部の協力を得ながら進める体制へ移行されることになった。これにより、同センターのTL（Teaching & Learning）部会では、本報告書の作成や回答結果を活用したFDプログラムの企画を、教学IR（Institutional Research）部会では、アンケート実施の企画やデータ集計・分析をそれぞれ担うことになった。

## 2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター、全学共通カリキュラム運営センター、学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部等を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

### 2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

### 2-2 設問項目

5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp.7-8参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2019年度は、文学部（2設問）、経済学部（5設問）、理学部（4設問）、現代心理学部（3設問）、全学共通カリキュラム運営センター（6設問）が学部等による設問項目を設定した（p.9参照）。

#### 全学共通カリキュラム運営センターの開設する科目等の表記について

<本報告書における表記>

- ① 科目の開設学部等を示す場合 : 「全学共通カリキュラム運営センター」
- ② 開設科目の総称を示す場合 : 「全学共通科目」
- ③ ①または②を略して示す場合 : 「全学共通」

## 2019年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。  
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。  
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

<b>科目コード/Course No.</b>	<b>本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)</b>
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	<b>学部</b> (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	<b>学科</b> (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U) (W)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	<b>学年</b> ① ② ③ ④
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	<b>本学学部生以外</b>
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別外国人学生 (Special International Students) (特外)
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (特聴)
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (特他)

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない  
〔評価欄〕

<b>I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>		
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満		⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した		⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした		⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った		⑤ ④ ③ ② ①
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間		⑤ ④ ③ ② ①
<b>II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>		
1) 聞きやすい話し方だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた		⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった		⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない (9)	⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない (9)	⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた		⑤ ④ ③ ② ①
<b>III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。</b>		
1) 自分にとって新しい考え方・発想		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識		⑤ ④ ③ ② ①
3) 自分で調べ、考える姿勢		⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味		⑤ ④ ③ ② ①
<b>IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。</b>		
1) わかりやすい授業だった		⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった		⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた		⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した		⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。



## V. 学部等による設問

### 文学部

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

### 経済学部

- 1) (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた
- 2) (基礎ゼミナール1) レジюмеやレポート作成の力がついた
- 3) (情報処理入門1) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
- 4) (情報処理入門1) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
- 5) (情報処理入門1) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた

### 理学部

- 1) シラバスに沿って授業が行われた
- 2) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 3) (1年次春学期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 4) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

### 現代心理学部

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

### 全学共通カリキュラム運営センター

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた
- 5) 【学びの精神のみ対象】 この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた
- 6) この授業の登録方法 (次の中から選んでマークしてください)  
⑤ 1次抽選登録 ④ 2次抽選登録 ③ 科目コード登録 ② その他 ① 覚えていない

## 2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通科目および学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中講義や実技を伴う科目、全学共通科目の言語系科目を除外した科目とした。

2019年度は、3年に1度の「1教員1科目」の原則で実施する年度であった。

しかし、各学部等において、「1教員1科目」に加え、学部等の必要性に応じた科目も対象にしたいとの要望が寄せられたので、それらも実施対象とした。

各学部等の科目選定方針の詳細については、「4. 学部等総評」にて確認されたい。

## 2-4 実施科目数

実施科目数は春学期 943 科目、秋学期 813 科目、合計 1,756 科目であった。

実施予定科目数は、春学期 957 科目、秋学期 836 科目、合計 1,793 科目であったので、全学の実施率（実施科目数/実施予定科目数）は 97.94%（1,756/1,793）、所見票提出率は 79.27%（1,392/1,756）となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		春学期	秋学期		春学期	秋学期		春学期	秋学期
文 学 部	306	169	137	299	166	133	253	135	118
経 済 学 部	227	143	84	223	142	81	187	121	66
理 学 部	103	53	50	101	53	48	92	49	43
社 会 学 部	125	63	62	123	62	61	89	51	38
法 学 部	76	28	48	73	28	45	59	23	36
経 営 学 部	108	60	48	103	57	46	69	38	31
異文化コミュニケーション学部	98	50	48	98	50	48	69	30	39
グローバル・バリエーション・プログラム運営センター	19	7	12	19	7	12	15	7	8
観 光 学 部	98	52	46	96	52	44	74	42	32
コミュニティ福祉学部	125	60	65	123	59	64	92	44	48
現 代 心 理 学 部	81	36	45	78	35	43	62	31	31
全学共通カリキュラム運営センター	367	196	171	360	192	168	277	149	128
学校・社会教育講座	60	40	20	60	40	20	54	34	20
合 計	1,793	957	836	1,756	943	813	1,392	754	638

## 2-5 実施期間

下記の実施期間のうち、アンケートの実施は1週目を原則とし、2週目（最終授業週）は予備週とした。

春学期：2019年7月6日（土）～7月19日（金）

秋学期：2020年1月6日（月）、1月9日（木）～1月22日（水）

## 2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、延べ履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	春学期		秋学期		合計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	13,297	9,004	9,965	6,991	23,262	15,995
経 済 学 部	17,462	9,179	4,599	2,844	22,061	12,023
理 学 部	4,002	2,549	3,091	1,808	7,093	4,357
社 会 学 部	9,555	5,620	7,712	3,759	17,267	9,379
法 学 部	7,179	2,944	8,401	3,537	15,580	6,481
経 営 学 部	7,899	4,280	6,766	3,393	14,665	7,673
異文化コミュニケーション学部	2,091	1,509	1,337	999	3,428	2,508
グローバル・リベラル・アーツ・プログラム運営センター	140	118	207	151	347	269
観 光 学 部	8,104	5,832	5,001	3,339	13,105	9,171
コミュニティ福祉学部	5,937	4,236	5,398	3,628	11,335	7,864
現代心理学部	3,646	2,766	3,974	2,691	7,620	5,457
全学共通カリキュラム運営センター	21,658	14,740	19,960	12,541	41,618	27,281
学校・社会教育講座	1,660	1,341	540	408	2,200	1,749
合 計	102,630	64,118	76,951	46,089	179,581	110,207

## 2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、Web上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。

所見票閲覧システム URL <https://wwwj.rikkyo.ac.jp/kyomubu/etsuran/top.html>

※閲覧にあたってはV-Campus ID／パスワードが必要



### 3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

#### 3-1 科目担当者

担当科目の以下の集計結果をアンケート実施1~2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載し、これらを基に、科目担当者に所見票（p.15にサンプルを掲載）の執筆を依頼した。

- ・集計結果票（p.14にサンプルを掲載）
- ・「記述による評価」一覧票
- ・アンケート元データ

#### 3-2 学部等

以下により集計し、2)の結果と科目担当者が執筆した所見票を送付の上、学部等総評の執筆を依頼した。

##### 1) 集計の方針

集計の方針は、以下のとおりとした。

- ①学部等別・学科等別に集計する。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計実施の有無は、学部等の判断に委ねる。
- ③科目選定方針が「1教員1科目」である本年度は、全学集計を行うほか、全学部等の設問項目別平均値の一覧表を作成する。

##### 2) 集計内容

###### ①回答者数・回答率

アンケート回答者数を学部等別、学年別に集計した（合計も記載）。また、アンケート実施科目について学部等別の回答率（回答者数/履修者数）を算出した（p.64参照）。

###### ②平均値に関する集計

平均値に関する集計は、下表のとおり行った。

集計単位 提供した 集計データ	全学	全学部等	学部等別 <sup>*1</sup>	学科等別 <sup>*1</sup>
設問項目別	● (p.65参照)	● (p.66参照)	● <sup>*2</sup> (pp.69-81参照)	●
学年別	● (p.67参照)	—	●	—
授業規模別	● (p.68参照)	—	●	—

\*1 学部等には、当該学部の結果を提供

\*2 学部等には、設問項目別に回答割合を示した帯グラフも提供

なお、2013年度より、アンケート設問項目の「I1) 出席率」および「I6) 授業時以外に学習した時間」については、以下の通り数値を置き換え算出している。

・ I 1) 出席率

「5:90%以上」 = 100、「4:70-89%」 = 80、「3:50-69%」 = 60、  
「2:30-49%」 = 40、「1:30%未満」 = 20

・ I 6) 授業時以外に学習した時間

「5:3時間以上」 = 3.5、「4:2-3時間」 = 2.5、「3:1-2時間」 = 1.5、  
「2:1時間未満」 = 0.5、「1:0時間」 = 0

**③グループ集計（実施学部のみ）**

グループ内の科目間を比較するデータとして、設問項目ごとの科目別回答割合を示す帯グラフ（p.16 にサンプルを掲載）、科目別平均値一覧表およびレーダーチャート（p.17 にサンプルを掲載）を提供した。

**【2019年度グループ集計実施学部】**

経済学部

経営学部

グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター

サンプル <科目担当者へ通知する集計結果票>

2019年度春学期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	土	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時間	4	教室	N212	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、( )内はパーセント							1から5の数字の平均

\*II-7)、8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	90.71	*1
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82	
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16	
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36	
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95	
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	0.72	*2

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21	
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00	
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91	
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00	
5) 十分な静肅性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73	
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05	
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6 (11%)	5 (9%)	3.47	
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5 (9%)	4 (7%)	3.11	
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98	

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00	
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22	
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66	
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31	

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09	
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14	
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14	

次ページ以降に、「記述による評価」一覧票を表示します

\*1) 「5:90%以上」=100 「4:70%~89%」=80 「3:50%~69%」=60 「2:30%~49%」=40 「1:30%未満」=20として平均を算出  
 \*2) 「5:3時間以上」=3.5 「4:2~3時間」=2.5 「3:1~2時間」=1.5 「2:1時間未満」=0.5 「1:0時間」=0として平均を算出

サンプル <科目担当者が執筆する所見票の書式>

2019年度春学期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価01 開講曜日 土 開講時間 4 担当者 立教 太郎 教室 N212 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー
■	■	■	■	■	■	■

\*「無-」, 「0」は「選択しない」も含む

授業評価に対する担当教員の所見

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70~89% 3:50~69% 2:30~49% 1:30%未満)
- 2) この授業に積極的に参加した
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
- 4) 授業をききかけにして発展的な勉強をした
- 5) シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った
- 6) この授業に関連して、授業時以外の学習した時間 (四捨して、1週間に 5.3時間以上 4.2~3時間 3.1~2時間 2.1時間未満 1.0時間)

記述による評価に対する担当教員の所見

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 聞きやすい話し方だった
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった
- 4) 各回の授業内容は明確だった
- 5) 十分な粘着性が保たれた
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
- 7) 板書のしかたが適切だった
- 8) 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

改善に向けた今後の方針

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思えますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
- 3) 自分で調べ、考える姿勢
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味

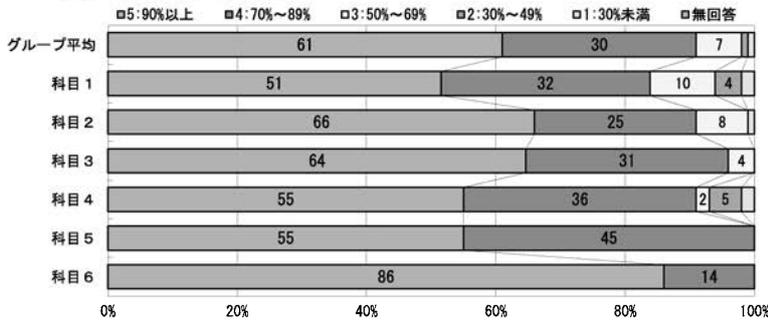
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった
- 2) 授業全体の目標が明確だった
- 3) 学問的興味をかきたてられた
- 4) この授業を受けて満足した

# サンプル <学部等へ通知するグループ集計結果>

## 1) 設問別帯グラフ ( 5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 9:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答 )

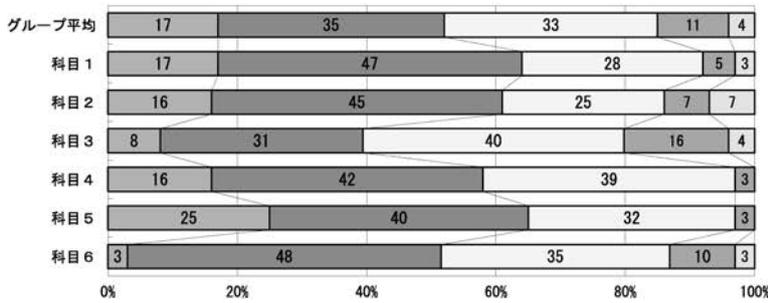
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*1	平均*2	無回答
グループ平均	113	94.87	-
科目1	19	96.90	-
科目2	15	96.00	-
科目3	20	95.67	-
科目4	21	97.87	-
科目5	18	86.89	-
科目6	20	92.22	-

\*1 「無回答」は除く  
\*2 I-1の平均値の算出方法は表紙に記載

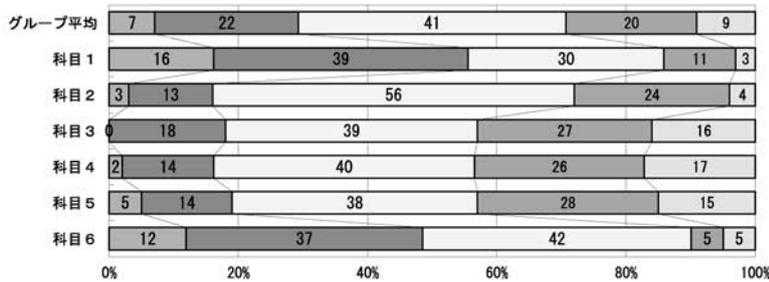
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目1	18	3.72	-
科目2	15	3.69	-
科目3	20	3.20	-
科目4	21	3.78	-
科目5	18	3.90	-
科目6	20	3.46	-

\* 「無回答」は除く

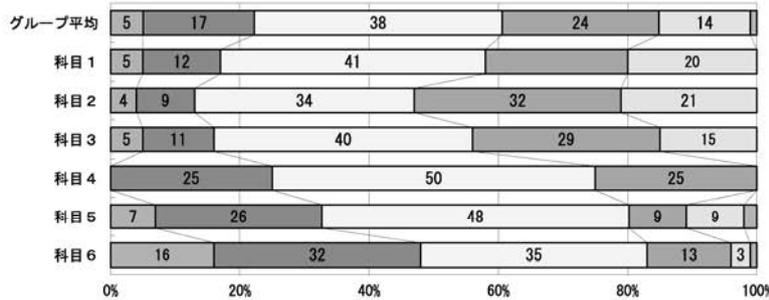
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目1	19	3.58	-
科目2	15	2.76	-
科目3	20	2.65	-
科目4	21	2.63	-
科目5	18	2.93	-
科目6	20	3.67	-

\* 「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



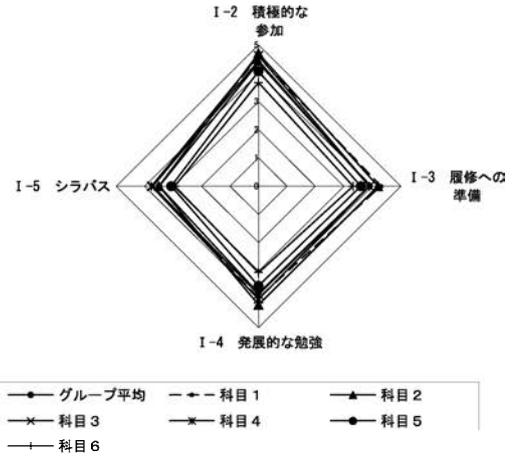
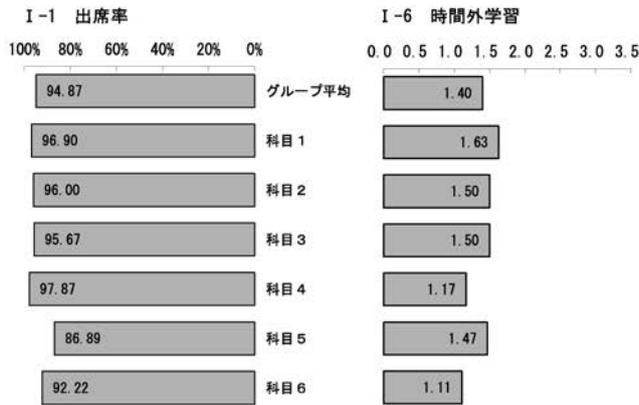
	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	2.98	2
科目1	19	2.60	-
科目2	15	2.42	-
科目3	20	2.67	-
科目4	21	3.09	-
科目5	18	3.12	1
科目6	20	3.56	1

\* 「無回答」は除く

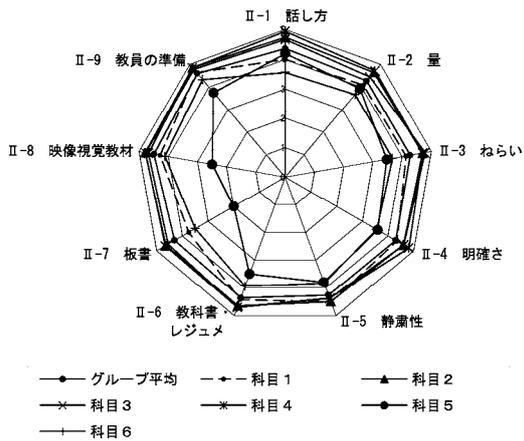
## 2) 平均値のレーダーチャート

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)

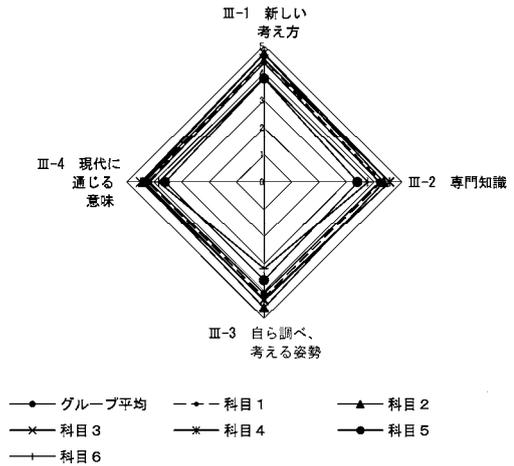
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



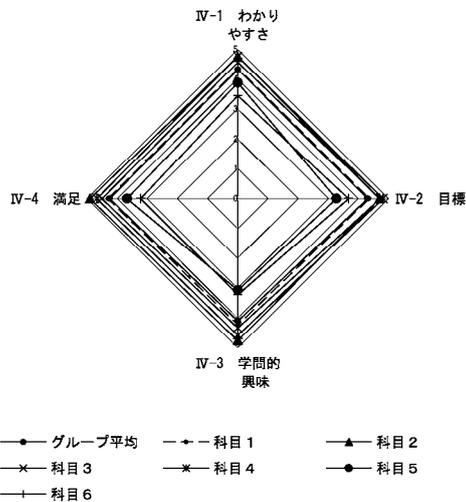
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



## 4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（学生の意見に関する内容を含む）
4. 今後の改善に向けて

## 4-1 文学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2019年度は、学部等ごとに1教員1科目実施することになっていた。

文学部では、講義科目を中心として、演習科目を含む形で調査を行うこととした。1年次の必修科目等の導入教育にあたる科目、文学部基幹科目、各学科・専修で必要とされる科目など、科目の特性を見渡しながらか、各学科・専修ごとに対象科目を指定し、全体の状況を見据えながら選定した。

なお、学部による設問項目については、前年度を踏襲した。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

アンケート実施科目数は合計299科目で、内訳としては春学期166、秋学期133科目であった。調査対象となった科目の総履修者数は23,262名で、そのうちの68.76%にあたる15,995名から回答があった。この回答率は全学平均(61.37%)より大幅に高かった。実施科目数が増えたためか、昨年度の回答率(69.11%)よりは下がったが、文学部としては継続的に一定の回答率を確保している。

学年別の回答者数を見ると、1年生2,999名、2年生5,538名、3年生5,329名、4年生1,846名、その他が283名となっている。導入教育を中心に学科・専修ごとに科目を指定し、それぞれの動向を把握するというねらいに対応した分布になった。

#### I 「授業への取り組み方について」

文学部において、I1「出席率」は昨年度の92.38%から92.55%へ、I2「授業参加の積極性」は4.06から4.13へ、I3「十分な準備」は3.56から3.64へ、I4「発展的な勉強」は3.48から3.55へ、I5「シラバスの有効性」は3.77から3.95に上昇した。I6「授業時以外の学習時間」は1.11から1.06になったが、これは2017年度と同数値であり、全学平均よりは高い。

#### II 「授業の進め方」

II7「板書のしかた」を除く全項目で4点台となっており、昨年度同様全体的に高い評価が与えられている。II5「授業の静粛性」については、昨年度と同様、教室規模によって大きな差があらわれている。50名以下の教室では4.56であるのに対し、151名以上では3.91である。3.91という数字は、昨年度の3.72と比較すれば静粛性が大きく改善されていることを示すが、依然として大規模教室での静粛性の確保は大きな課題である。なおII7「板書のしかた」は昨年度が3.91、本年度は3.98である。II8「映像視覚教材」とII9「教員の授業準備の周到さ」は4.33と4.45という高い数値を保っている。II9は101~150名規模の教室でも4.53、151名以上の規模の教室でも4.33という高い数値を出しており、静粛性の問題はあるにせよ、教員側は大人数講義において、より一層綿密な準備を行って授業に臨んでいることがわかる。

#### III 「授業から得たもの」

III1「自分にとっての新しい考え方」、III2「基本的な専門知識」、III4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」はどれも4点台となっており、相応の効果があがっているように思われる。III3「自分で調べ、考える姿勢」は3.85であり、昨年度の3.77より高いが、151名以上の規模の教室では3.67と大きく落ちこんでいる。大人数講義におい

て、学生の自主的な学びをどのように保持するかが課題であろう。

#### IV「総合的評価」

4項目のいずれにおいても4点台となっており、全体としてある程度の水準が保たれたといえよう。特にどの教室規模においても4点台が維持され、大人数講義でも学生の満足度は高かったことがわかる。また学年別でもすべて4点台であることから、教員側が学年にも配慮して対応していることがわかる。

#### V「学部等による設問」

V1「教室の大きさ」、V2「受講者数」がそれぞれ4.34、4.33と、2018年度の4.21、4.15より大きく改善されている。ただしいずれも教室規模が151名以上になると数値が大きく落ち込むことが確認でき、大人数講義で一定の満足度が維持されているとしても、大規模教室利用のありかたを是正していくことが必要なのではないかと。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員が学生の評価と向き合い、その内容を正面から受け止めて、今後の改善策を探ることにつなげようとする姿勢を表明している。特に、評価が低い項目についてはそうした傾向が強い。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

##### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

教員の周知な授業準備、あるいは授業に向き合う姿勢に対して好感を抱く学生が多く、また教員の優しさに触れる記述も散見された。導入期の授業や演習での教員と学生との活発な交流がわかる記述も多かった。その一方で、課題の多さや厳しさが指摘され、また評価方法の急な変更についての苦情もあった。プリントの配布方法の改善や、リアクションペーパーに要する時間の確保、出欠チェックの公平さなどを要望する指摘など、教員にとって再考する必要がある、具体的かつ技術的な意見も少なくなかった。

##### 2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

多くの教員が、学生の指摘内容を丁寧に聞き取り、今後の授業に活かそうとする真摯な姿勢を見せていることは確かである。板書がわかりにくい、パワーポイントのスライドが見にくいなどといった指摘や、私語を禁止し静粛性を維持して欲しいという要望がかなり多いが、教室の規模や構造に由来する、よんどころない事情も垣間見られるなかで、多くの教員がこうした指摘をしっかり受け止めている。

演習・講義といった授業種別を問わず、学生からのコメントに励まされたという旨の記述が少なからず見られる。大人数講義でも、学生のリアクションペーパーに対する教員の丁寧な対応が双方向性を維持し、学生にも好評価であったことなどがうかがわれる。学生との意見交換を求める姿勢が教員側に保持されているがゆえに、所見欄からこうした様相が見えてくるのであろう。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が、アンケートの結果を受けて、授業改善を目指した対応を行おうとしている。改善すべき点は授業ごとに異なるが、配布資料の分量や方法、オンライン授業支援システム Blackboard の活用、自主的な学習を促す課題のありかた、私語の抑止などが挙げられる。私語への対策が不可欠であることは多くの教員が認識するが、大教室では、教員側からは私語が把握できず、注意に至らない場合がある。容易に改善できない所以であろう。学生が理解しやすく、満足度が高い授業を目指すことはもちろんのことだが、受講生の基礎知識にばらつきがあり、答えばかりをすぐに求める学生が多いなかで、どのような授業が学生の知的成長にとって良いのか、模索する姿が所見欄からはうかがわれる。

## 4. 今後の改善に向けて

2019年度は100分授業が導入された初年度にあたる。これにより授業で提供される情報量が増えて大変だったという学生も見られるが、それほど多くはない。100分授業は教員にとっても初めての経験であったが、教員の周到な準備により大きな混乱はなかったといえよう。もちろん今後、さまざまな要素が検討され、その上で改善が模索される必要はある。

多くの所見欄から、授業時以外における学生の学習時間をどう確保するか、また、それを踏まえて授業時に学生と教員、あるいは学生同士の双方向的なやりとりをどのように確立していくかが課題として見えてくる。

また、特に講義では映像やパワーポイントが多用され、学生にも好評価であるが、一方で文字資料の精読を重視する授業が、文学部においてかなりの比重を占めることも事実である。そのもとで学生をいかに集中させ、より高度な思考へと誘うかについても、引き続き教員の側の根気強い努力が不可欠であると考えられる。

大規模教室での静粛性の維持、その改善は、継続して取り組むべき課題として残されたままである。履修人数の制限、教室の利便性の向上など、教員の努力だけではない、さまざまなサポート方法を模索することも肝要であろう。

## 4-2 経済学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2019年度の選定方針は概ね以下の通りである。

- ・1教員1科目を原則に主要担当科目の春学期科目で実施する。なお通年科目の場合は、秋学期に実施する。また、1教員1科目（主要担当科目）を原則とするが、必修科目等を担当する専任教員は、複数科目で実施する。ただし、兼任講師が必修科目を含む複数科目を担当する場合は、必修科目のみの実施でよいこととする。
- ・必修・基本選択科目は全科目・全クラス実施する。なお、基礎ゼミナール1・2（春学期・秋学期）、情報処理入門1・2（春学期・秋学期）、外書講読・英A（春学期）は全クラスで実施する。
- ・その他に、経済情報処理A（春学期）、財務情報処理A（春学期）、政策情報処理A（春学期）および、キャリア教育関連科目である課題解決演習A（秋学期）、課題解決演習B（秋学期）、課題解決演習C（春学期）及びインターンシップ（通年）は実施する。
- ・他学部所属教員による科目は原則として実施しないが、例外科目として、統計調査論1（春学期）、調査実習（通年）は実施する。

アンケートのねらいは、学生側からの授業評価を通じて、今後の授業改善のための課題を各々の教員が認識することにある。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

2019年度のアンケート実施科目数は223科目（実施予定科目は227科目）であり、回答者は延べ12,023名となった。履修者数と比した回答率は、54.50%と全学平均（61.37%）より低いものになった。回答率が低かった要因として、1年次では、必修あるいは自動登録科目が多いためその回答者数が多くなっているが、学年が高くなるにつれて回答者数が減少しており（1年次4,934名、2年次3,137名、3年次2,473名、4年次1,192名）、高年次の学生の相対的な「アンケート離れ」があったことが回答率の低下の要因の一つとなっている。

設問項目別平均値をみると、「Ⅰ この授業へのあなたの取り組み方について…」の中の「Ⅰ6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」の平均値が1.29であったことを除いて、全ての項目で3.50以上の数値が算出されている。

それらの項目のうち、相対的に平均値が低い項目としては「Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」が3.55、「Ⅰ5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」が3.74であった。

また、「Ⅲ この授業から得ることができたもの」の項目のうち、「Ⅲ2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」は4.00であったのに対し、「Ⅲ3 自分で調べ、考える姿勢」が3.79と相対的に低くなっており、今後、経済学部としては、学生が能動的・自主的に、自らの「考える力」を高めるような授業の工夫が必要になっていると考えられる。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 グループ集計の分類

授業の目的および内容に共通性があり、複数コマ展開されている1年次科目を中心に、経済学1、経済学2、簿記1、簿記2、情報処理入門1、情報処理入門2、統計学1、統計学2、基礎ゼミナール1、基礎ゼミナール2を抽出してグループ化し、集計を行った。基礎ゼミナール1・2については、それぞれ担当者（専任・助教・兼任）別にグループ化したため、総計14のグループ集計を行った。

#### 3-2 グループ集計の結果の概要

##### 1) 必修科目

必修科目のグループには、「経済学1」、「経済学2」および「簿記1」、「簿記2」が該当する。

「経済学1」、「経済学2」（および「経済学1」と「経済学2」の旧カリ通年科目である「経済学」）はそれぞれ共通シラバスの下、複数の専任教員と兼任講師によって講義が実施された。これらの結果を見ると、「経済学1」では、兼任講師に比べて専任教員の評価項目が全体的に高く、また、「経済学2」では、兼任講師の評価項目が相対的に高い平均値となっていた。そのため、評価の高い教員の教授法について、兼任講師を含めた担当者グループ内で共有し、グループ全体の教育力を向上させていくことが必要とされている。

一方、「簿記1」「簿記2」は、その科目特性もあろうが、担当者ごとに大きなバラつきが生じている。例えば、「簿記1」の「IV4 この授業を受けて満足した」の項目では、最も評価の高いクラス（平均4.82）と最も評価の低いクラス（平均3.24）で1.5以上の差が生じており、専任教員および兼任講師間での情報の共有化を図りながら、評価の低いクラス担当者の教授法の改善を行う必要があるように思われる。

##### 2) 1年次自動登録科目

1年次自動登録科目に該当するグループには、「基礎ゼミナール1・2」や「情報処理入門1・2」、「統計学1・2」が該当する。

「基礎ゼミナール1・2」および「情報処理入門1・2」については、全般的に評価は高かったが、「基礎ゼミナール1・2」の兼任講師が担当する授業では学生の授業に対する満足度が著しく低いケースも存在していた。この点については、定期的な基礎ゼミ担当者会議を実施し、授業情報および授業運営の共有化を図りながら、全体的に授業の水準を高めていくような努力を続けていく必要がある。

### 4. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

所見の記述量は教員によって差異があるものの、内容的には、板書、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）およびレジュメなどの配布資料等について改善していく姿勢が示されていた。また、授業内容に対する興味関心を喚起しながら、いかに自主的な学習につなげていけばよいのかということについてのコメントや、今年度から導入された100分授業への時間配分への対応についてのコメントなども見られた。

## 4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

「100分間聴いていて飽きなかった」、「授業の初めに前回の復習や質問への回答をしてくれる点がよかった」、「取り扱う事柄を具体的な例を挙げて教えてくれるので理解しやすかった」、「レジュメに書いてあること以外の知識も教えてくれるので興味深かった」、「説明がわかりやすく、面白い話をたくさん聞くことができた」などの意見が寄せられており、学生に学問のおもしろさを実感させるような授業法や教材等の工夫によって、授業の満足度が高められていることを具体的に確認できた。なお、その一方で「細かすぎる」「難しい」「授業についていけない」、「意味がわからない」、「理解できない」、「メリハリがない」といった意見も寄せられていた。

以上のように、記述による学生の意見は多様性に富んでいるが、例年同様、教員の説明（声の大きさ・スピードなど）や配布資料・教材の内容についての意見が寄せられる傾向にあった。

### 2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的な評価に対しては、それをさらに改良していくことが記されている。否定的ないし改善を求める学生からの指摘については、多くの教員が真摯に受け止め、改善に向けて努力する姿勢を示している。

## 4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多くの教員が、学生の理解を助け、知的欲求を満たすために細やかな継続的取り組みを実践しており、パワーポイント等の教材の改善や、レポートや毎回出される課題の整理・採点、アクティブ・ラーニングのための準備などに取り組んでいる。

## 5. 今後の改善に向けて

3年に1度の全教員対象のアンケートを実施したことにより、それぞれの授業を担当する教員の課題もはっきりとしてきた。また、今回のアンケートでは、学生が積極的・意欲的に授業に取り組む姿が確認できた一方で、授業時以外に、学生の主体的な学びの時間があまり増加しておらず、授業を契機として発展的な学びへの関心を引き出すことに関しては、まだ多くの課題が残されていることが明らかになった。

今後、経済学部での教育の質を高めていくために、担当教員間での「良い授業」の共有化や、アクティブ・ラーニングの授業手法の導入なども検討し、学生が主体的に授業に参加して学ぶ楽しさを実感できるような工夫を行っていく必要がある。

また、各講義科目において、その授業での学びが歴史的、理論的、実践的のどのような意味をもっているかをきちんと学生に伝えながら、学生が自分自身の興味・関心にしたがって、体系的に研究を進めていくことができる環境を整備し、その学びの意義を実感できるようなカリキュラムのあり方についても再検討していくことが必要となるだろう。

## 4-3 理学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2019年度は、「1 教員 1 科目」という全学的方針を守りながら科目の選定を行った。これまで理学部では各学科とも、経年変化を調査するために、毎年度なるべく同じ科目を選定する方針で行ってきた。2019年度についても昨年度同様、数学科は2010年度より実施の新カリキュラムで新たに設けた必修科目・選択科目を、物理学科は原則として複数教員担当科目を除くすべての講義科目を、化学科は必修講義科目と複数教員担当科目を除く選択講義科目を、生命理学科は原則として複数教員担当科目を除くすべての講義科目から教員1名あたり複数科目にならないように科目を選定した。共通教育科目については、独自にアンケートを行うこともあり、例年通り非実施であった。また、理学部独自の設問についても、前年度を踏襲した。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は61.43%であり、全学平均(61.37%)と同等であった。また、昨年度の回答率64.70%からは低下した。学年ごとの回答者数は1年生1,468名、2年生1,561名、3年生1,050名、4年生206名であり、昨年度に比べると、2,3,4年生の回答者数が増加し、1年生の回答者数が減少した。

学生の授業への取り組み方についての集計結果を昨年度と比較すると、(I1)から(V4)の、27項目すべてにおいて平均値が改善していた。ほぼすべての項目が2~3%程度上昇しているが、「(I1) 授業全体を通じての出席率」は昨年度93.29から今年度93.33と微増、「(I6) 授業時以外に学習した時間」は昨年度1.39から今年度1.40と0.7%程度の上昇にとどまった。詳しく見ると、授業時以外の学習が「3時間以上」と回答した学生が約10%であるのに対して「1時間未満・0時間」と答えた学生が約40%を超えているのは昨年度と同様であり、学生が自宅学習にかけける時間は依然多くない。

上昇幅が大きかった項目としては、「(I5) シラバスは受講に役立った」が3.59から3.73、「(II2) 各回の授業内容の量が適切だった」が3.92から4.06、「(V4) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった」が3.86から4.01、などがあり、様々な面において授業運営の改善が進んでいることがうかがえる。

学年別の比較では、「(I1) 授業全体への出席率」は1年生が高く(94.05%)、2年生、3年生、4年生と学年が上がるほど低くなっていった。逆に、それ以外の項目では学年が上がるほどポイントが高くなっている。これらは昨年度と同様の傾向である。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

肯定的な評価を受けていると所見を述べている教員が多くみられたが、授業時以外での学習時間の少なさに懸念を示す教員が多いのは昨年と同様である。一方で、学生の頑張りや熱意を評価するコメントもみられた。

### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

#### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

「肯定的評価として多い意見の集約」

授業が分かりやすい、解説が丁寧などの評価があった。また、板書の丁寧さや、黒板の使い方に関する教員の工夫を評価する意見があった。レジュメ、資料の配付やオンライン授業支援システム Blackboard での公開に関して多くの教員が肯定的な意見を得ていた。また、例題、演習問題、小テストなどの解説に関しても肯定的な意見があった。

「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価としては、授業のスピードや話すスピードが速い、声が聞き取りにくい、板書が見にくい、レジュメの誤植、授業内容過多などがあった。また、教室によってはマイクなどの機器の不備や、収容人数に余裕がないなどの問題があったようである。

#### 2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

学生からの意見を受けて改善を試みたいという所見が多くみられた。講義ノートやレジュメの配付などを行っている教員にはそれが肯定的に受け止められていることがうかがえる。一方で、スライドを用いた授業では学生が受け身になりがちな点を懸念する所見がみられ、黒板との併用などに苦心しているようである。また、授業が「易しい」「難しい」、板書が「遅い」「速い」など相反する評価への対応の難しさや、授業に対する積極性のなさを指摘するコメントもあった。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

多様な学生に対応するための授業内容の精選、板書、レジュメの改善、話し方の改善などが挙げられた。スライドの使用に関して内容や構成の工夫をしたいというコメントがあった。また、授業への学生の積極性、授業時以外での学習を促すために、課題や宿題を出す、学生の知的好奇心を刺激する授業内容を目指すことなどが改善策として挙げられた。100分授業となったことによる時間の余裕を生かして参加型の授業を取り入れたり、発展的な内容につながる話題に触れたりなどしたいというコメントもあった。

## 4. 今後の改善に向けて

アンケートの全ての項目が昨年度を上回ったということからも、各教員は昨年度の授業評価アンケートでの指摘を受けて、2019年度の授業で改善を行ったことがうかがえる。これは各教員の真摯な努力の積み重ねが実を結んだものといえる。多くの教員はさらに授業の向上を目指したいと述べており、各教員が今後もこの姿勢を継続することにより、さらに良い授業が展開されていくであろうと期待される。また、スライドを用いた授業が増えてきており、それらの機器の使い方にはまだ改善の余地があると思われる。

一方で多くの教員が、昨年度同様に学生の積極性のなさ（授業に関する質問の少なさ、授業時以外での学習時間の少なさ）に懸念を示している。それに対して、多くの所見では課題や宿題、小テストの実施などを改善策に挙げているが、100分授業になったことを生かした授業内容及び授業運営の再編成も有効であろう。

## 4-4 社会学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2012年度導入の現行カリキュラム下の、学部としての授業評価アンケート対象科目選定方針は以下の通りであり、2019年度は、前年度を踏襲した従来通りの選定を行った。

①必修科目はすべて実施する

②講義科目については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う

2012年度カリキュラムでは、従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に学部として基礎教育の充実を目指すことになった。そのため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要である。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、2012年度からは必修科目は全て実施するという変更を行った。また、「1教員1科目」が2019年度全学科目選定方針であるが、社会学部においては、②を2007年度以降選定方針としており、2019年度は講義科目について最低「1教員1科目」を選定し、実施した。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

#### 2-1 授業規模別

回答者人数が少ない授業規模ほど総じて評価が高くなるのは、社会学部に限らず、例年の傾向である。しかしながら、50名以下を「S」、51～100名を「M」、101～150名を「L」、151名以上を「LL」として、社会学部123科目の結果を見ると、評価がS>M>L>LLという単純な線形的関係でないものが多い。

Sは、「I6 授業時以外学習時間」、「II5 静粛性」、「II6 教科書の効果」、「II7 板書の適切さ」、「III3 自分で調べ、考える姿勢」、の各項目で評価が高いが、それ以外の項目では、SとMとはほぼ同様であるか、むしろMの方が上回っている項目も多かった。平均が4点台の項目は、IIの9項目中S、Mとも8、IIIの4項目中S、Mとも3、IVの4項目中では、S、Mともすべてである。以上から、100名以下のクラスは、いずれも相対的に高い評価を得ていると言える。

また、「I1 出席率」は、Sが89.56、Mが91.17、Lが92.69、LLが94.18と、「I2 授業への積極的参加」は、Sが3.96、Mが3.97、Lが3.98、LLが4.09と、むしろ規模が大きくなるほど高く、「I3 授業履修にあたっての十分な準備」(3.45～3.52)も、規模による違いは大きくない。むしろ、S、Mでこれら2項目はもう少し引き上げるための工夫が求められる。

なお、II、III、IVの各項目では、S、M、LLに比較して、Lの評価が低くなる傾向があった。II、III、IVの17項目中、平均3点台の項目は、Sが2、Mが2、Lが15、LLは3であった。「IV4 この授業を受けて満足した」はS4.13、M4.17、LL4.09に比較して、L3.83、と下がっている。社会学部では、2019年度はLLの評価が低くないため、L規模での授業における工夫が課題といえよう。

## 2-2 学年別

昨年度までと同様、「I1 出席率」は学年が進むにつれて低下している（1年 94.45、2年 93.03、3年 91.35、4年 86.02）。ただし、「I2 授業への積極的参加」（1-3年 4.01~4.04、4年 3.92）は4年生のみ低く、「I3 履修にあたっての十分な準備」（1年 3.37、2年 3.52、3年 3.62、4年 3.46）も4年生は低い。それに対し、上記項目以外のいずれの項目も、学年が進むにつれて数字が高くなる傾向がみられる。例えば「IV4 授業満足」は1年から4年まで 3.92、4.05、4.16、4.27 であり、4年ほど満足度が高い。こうした傾向は、学年により履修する授業規模が異なることが一因としてあげられる。学年が上がるにしたがって、授業規模が小さくなる傾向があり、2-1で述べたとおり、L規模は評価が低くなる傾向があるため、学年ごとの差につながっていると推測できる。また、入学した学生が、学習の進展にそって大学の授業に適応していくことに加え、初年次向けの基礎的な総論よりも、高学年向けの各論や発展的な科目の方が、おそらく学生にとっては興味深いと感じられることもあるだろう。

## 2-3 学科別

科目開設学科による分類では、全体として学科間の差は大きくないが社会学科の数字がわずかに高く、共通科目が相対的に低めの数字となっている。例えば「IV4 授業満足」は、社会学科 4.26、メディア社会学科 4.21、現代文化学科 4.15、共通科目 3.97 である。なお、II、III、IVの設問で 4.00 を超えている項目は、社会学科が 16（前年 15）、現代文化学科が 16（前年 15）、メディア社会学科が 14（前年 15）、共通科目は 8（前年 2）であり、学科科目については現状を維持しつつ、共通科目の運営に改善が認められた結果となっている。

## 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

例年と比較した上で、出席率の高さ、および学生の積極的参加を肯定的にとらえる記述が多くみられた。とくに大人数講義であっても、担当教員が十分な対応を行った結果として、肯定的な評価に結びついているとする記述がみられた。講義であっても、グループワークなど学生への主体的参加を促す試み、リアクションペーパーやコメントなどフィードバック機会の確保、映像資料、ゲストスピーカー、オンライン授業支援システム Blackboard の活用など、授業の工夫についての記述も多い。一方で、例年同様、授業の静粛性を課題とする記述もみられた。また、授業時間外での学習機会、発展的学習について、促す必要性の認識と具体的な実施の難しさについても記述があった。

### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

#### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

所見票では、授業に対する積極的評価（配布資料、授業の仕方、視聴覚資料の活用などの工夫）、授業環境（静粛性、温度など）について教員の対応を評価する見解と不十分であることの指摘の両面、授業の進め方の速さや量（速すぎる場合、詰め込みすぎる場合の指摘）、展開される議論のレベル（難しすぎる場合の指摘）、話し方（声の大きさ、スピード）についての要望などがみられた。また、遅刻や途中入室、私語やスマートフォン使用に対

応するルールの厳しさを指摘する意見、レジュメやパワーポイントの Blackboard 等での共有を求める要望があった。

## 2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的コメント、改善を求めるコメント、両者とも、積極的に受け止め、よりよくするために役立つ意向が強く表明されていた。授業の進め方や難易度については、多様な学生たちに一律に対応できないことへの難しさも言及されている。授業環境についても、厳しい対応を評価する学生も多くいる一方、あまりに厳しすぎると授業の雰囲気に影響がでるため、調整が難しいことを認識した上で、積極的に取り組む姿勢がみられた。また、遅刻や途中入室、私語やスマートフォン使用に対応するルールへの意見やレジュメやパワーポイントの Blackboard 等での共有要望に対しては、なぜ現状のようなルールになっているのか、理由を学生に明示しているという記述が複数みられ、対応に真摯な姿勢がみられた。

## 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

3-1にあるような授業の工夫、配布資料の改善、授業内容の発展・刷新、発展的学習、授業外学習を促す工夫への取り組みの必要性、3-2にある授業環境改善への要望の対応などが多くみられた。

## 4. 今後の改善に向けて

改善すべき点は、2018年度の改善点にも述べたが、継続点として、静粛かつ積極性のある授業環境を実現するために、大規模授業の減少および運営の工夫に努めることである。2014年度から一部の大規模授業で他学部履修者の人数制限を行っており、2019年度においても、履修制限した科目については、一定の効果をあげているが、制限していない科目では履修者が非常に多い科目が存在している。このため他学部履修者の人数制限を引き続き検討するとともに、開講曜日・時限などの熟慮を呼びかける。一方で、2019年度は、2-1や3-1で示した通り、担当教員による大規模授業運営の工夫もあって、150人を超える大規模授業の弊害が抑制されている傾向がみられる。こうした改善は、継続していく必要がある。

2012年度カリキュラム改訂で導入した社会学原論、社会調査法、基礎演習などでは担当者会議を設置して、授業の運営や内容について日常的に検討する体制をとっているが、今後も継続的に授業運営および内容の改善に取り組んでいく。必修科目は、カリキュラム上必須の知識を学ぶ場所としての制約があるため、カリキュラムの充実を維持しつつ、運営方法の改善を行っていく必要がある。

## 4-5 法学部

### 1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員および実施を希望する科目を対象にアンケートを行うことにした。

2019年度は、全教員（専任・兼任）につき授業評価アンケートを実施する年度に該当する。そこで、①講義科目については1教員1科目を対象とし、②演習科目は対象としない、との選定方針にもとづき、合計73科目につき授業評価アンケートを行った。大人数科目が多い法学部においては、講義科目における教育が容易ではないことに鑑み、これらの授業の改善を重視している一方、演習科目においては少人数を対象としておりアンケート調査が行いにくいという事情があるためである。

なお、毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しているため、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられるためである。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

集計データを参照し、回答率、設問項目別平均値、授業規模別平均値、学年別平均値の結果についてまとめる。

回答率は、41.60%であり、昨年（33.91%）からやや改善したものの、他学部の回答率と比較すると突出して低い。アンケート対象となっている講義科目では、出席が成績評価に反映されない場合が多いことから、授業の出席率が低くなっていることが原因であると考えられる。

設問項目別平均値においては、前年度に引き続き、Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」（4.28）が、きわめて高い値を示している。また、Ⅱ1「聞きやすい話し方だった」（4.01）、Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」（4.06）、Ⅱ4「各回の授業内容は明確だった」（4.11）、Ⅱ5「十分な静粛性が保たれた」（4.23）、Ⅱ6「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」（3.97）、Ⅱ8「映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった」（4.07）と、授業の進め方については、全般的に、高い値であった。総合評価においても、Ⅳ1「わかりやすい授業だった」（4.01）、Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」（4.05）、Ⅳ3「学問的興味をかきたてられた」（3.88）と高く、満足度は極めて高い（Ⅳ4（3.97））。講義科目を対象としたアンケートにおいて、授業を通じて教員が学生に提供しようとした狙いが明確に伝わっていることがうかがえ、また、授業の準備が評価されていること、映像視覚も含めて教材の適切さ、さらに静粛性が保たれているとされたことは、教員の努力や工夫の成果と評価できよう。ただし、映像資料として学生たちが想定している教材は板書の代替となるパワーポイントスライドではないことや、板書を行わない授業においても板書の見やすさを問う設問などがあり、少なくとも映像視覚教材や板書に関する設問に関しては必ずしも実態を反映していない。

例年に比べても全分野にわたって評価は高く、とりわけ長年の課題である学生の主体的な学びに関連する設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」（3.24）

および I 4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.17)の値も改善がみられる。ただし、I 6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(1.12)は決して十分とは言えず、今後も、学生の主体的な学びを促す方をさらに発展させていく必要がある。

授業規模別平均値であるが、今年度は、授業規模と平均値の間にさしたる関係性が見いだせない。一般的に言えば、授業規模が大きくなると平均値が下がるのであるが、平均値の下降傾向がそれほど顕著ではない。大人数科目、とくに 151 名以上の科目において学生の理解や満足を高める努力が一定程度の効果をあげているといえよう。

学年別平均値についてであるが、多くの項目において、学年が上がるにつれてやや値が高くなっており、大学における学習に慣れることで授業の理解が深まることが分かる。ただ、例年に比べて、学年間の差は小さく、初年次への配慮が一定の効果を上げていると評価できる。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

担当教員の所見では、各教員が、学生の率直な評価を真摯に受け止め、相対的に評価の低い項目があった場合については、次年度以降に改善を試みる姿勢を明らかにしている。

他方、学生の学習時間が短いこと、調査項目Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」の値が低いことを問題視する所見が散見される。各教員が、学生の学習意欲を引き出し主体的な学びを促せるよう、今後の工夫を約束している。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

##### 1) 所見票に現れた学生の意見(記述による評価)の集約

本授業評価アンケートとは別に、学期中に教員が ICT 技術を利用してオンラインでの学生の意見を集約し、授業に反映させる取り組みに対して、肯定的な意見が多かった。他方、学生の質問へのフィードバックに時間を取り過ぎるとする意見も散見され、他者の疑問も自分の学びにつながるものが広く共有されていないことが分かった。

レジュメ(配布資料)については、分かりやすいという肯定的意見が多い一方、同じ授業についても、分量が多いといった否定的意見もあり、当然のことではあるが、学生によりその評価が分かれる。

冷暖房の不備や板書の字の大きさを指摘する意見が散見され、大教室講義が抱える設備面での課題が明らかになっている。

##### 2) 上記1)に対する担当教員の所見のまとめ

多くの教員が、学生からの肯定的評価を今後の授業の励みとし、批判的な評価や要望に対して真摯な回答を寄せている。

なお、レジュメ(配布資料)の内容や量についての学生の要望やパワーポイント等の視覚教材を使用してほしいという学生の要望については、各学問領域の特性上、また、学修効果の関係から対応できかねることもあるとの所見も少なくなかった。教員にも、配布資料や授業形態について説明責任があると同時に、学生にも、上記の点について、とりわけノートテイキングスキルの重要性への理解が必要な面はあろう。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

レジュメ・板書・パワーポイントについて、見やすさ分かりやすさの観点から、改善を約束するコメントが多い。毎回の講義の狙いをより明確にすることを心掛けることや、学生の主体的な学びを促すための工夫を約束するコメントも多い。

#### 4. 今後の改善に向けて

2019年度の授業評価アンケートの結果においては、例年と同様、授業の進め方(Ⅱ)や授業全体(Ⅳ)について、学生が高く評価していることが分かる。一方、このような高い評価と比較すると、学生の授業以外での学習への取り組みが十分ではない点が残された課題である。前年度、当欄において、学生の主体的・積極的な学習を動機づけられる授業を実現すべく、ベストプラクティスの収集および情報共有を継続する方向性が示された。これにもとづき、2019年度には、教授会、基礎文献講読担当者会議、兼任講師との打ち合わせ会等を活用し、教員間での情報共有が行われた。各授業における改善は、未だ数値には表れていないものの、今後も、教授会、基礎文献講読担当者会議、兼任講師との打ち合わせ会等を通じて、学生に主体的・積極的な学習を促す工夫を教員間で共有し、各授業の改善を進める方針である。とりわけ、2020年度春学期におけるオンライン講義における主体的・積極的な学習の経験や、ICTの活用による双方向性の確保は、対面授業が再開された際にも大いに参考にされられると思われる。

なお、大教室の設備面については、構造上致し方ない点でもあるが、冷暖房についてはその場で教員に申し出ることや板書の見えやすい位置に座席を移動することを授業時に複数回アナウンスすることをベストプラクティスとして共有し、改善を図りたい。

## 4-6 経営学部

### 1. 科目選定方針とねらい

経営学部はこれまで通り、2～4年次演習および BLP・BBL 関連科目を除いて、原則として全科目を対象に、春学期 57 科目、秋学期 46 科目の合計 103 科目で授業評価アンケートを実施した。全科目を指定している理由は、「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。なお、BLP および BBL 関連科目について実施しない理由は、これらの科目が演習系の科目であり、科目の独自性も強いので、大学所定のアンケートでは十分に実態を把握できないからである。学部でも独自に詳細なアンケートを実施していることから、これらの科目を除くことにした。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

まず学生側の授業に対する取り組みを示す6項目について、「授業全体を通じての出席率 (I1)」の平均は92.55、「この授業に積極的に参加した (I2)」は4.10と、それぞれ高い数値を示し、回答者は積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。ただし、アンケート実施科目の回答率(回答者数/履修者数)が52.32%と低いことを考慮すれば、アンケートに回答するような積極的に参加する学生と、そうでない学生の取り組み方に差が生じている可能性が懸念される。

それ以外の授業に対する取り組みとして、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた (I3)」(3.62→3.74)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした (I4)」(3.54→3.63)、「シラバスは受講に役立った (I5)」(3.70→3.78)、「授業時以外に学習した時間 (I6)」(1.18→1.26)については、昨年度に続き数値が向上している。ただし、「授業時以外に学習した時間 (I6)」について、半数を超える学生が1時間未満と答えている。つまり、授業に積極的に参加しているものの、予習・復習の取り組みが少ない学生の割合が大きいことがわかる。また、学年別に見ると、1年次の学生の平均値が1.06と他の学年より低くなっており(2年1.36、3年1.35、4年1.31)、1年次から予習・復習につながる課題の工夫などが継続して必要であろう。

授業の進め方についても、全体的に昨年度からの改善がみられた。例えば「各回の授業内容の量が適切だった (II2)」(4.12→4.12)、「各回の授業のねらいは明確だった (II3)」(4.09→4.12)や「教員は授業の準備を周到に行っていた (II9)」(4.27→4.29)の項目はいずれも学生の評価が高まっており、教員の授業改善が一定の成果を上げていると考えられる。また「十分な静粛性が保たれた (II5)」に対する評価は、昨年度の4.04から今年度4.10へと3年連続で大きく改善している。特に大教室での講義で問題となる講義中の私語等に対する取り組みが、各講義において着実に進みつつあることがうかがえる。

授業から得られたものを示す4項目については、3項目が4.00以上となり、昨年度からの底上げがみられた。「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識 (III2)」は昨年同様最も高く4.10(昨年度は4.05)で、「自分で調べ、考える姿勢 (III3)」も昨年同様最も低く3.88(昨年度は3.79)であった。「自分で調べ、考える姿勢」について、学年別には、1年3.70、2年3.93、3年4.01、4年3.93となっており、1年次から2年次にかけて自学自習へ取り組む姿勢がある程度確立されていると推測できる。また、これを授業規模別で見ると、50

名以下の授業では昨年より0.06ポイント下げているものの、51名以上の規模の授業ではいずれもポイントが上がっており（50名以下4.11→4.05、51名～100名3.73→3.89、101～150名3.69→3.84、151名以上3.77→3.83）、入学直後の早い段階から自学自習を促す工夫や、受講生が50名を超える授業における対策が講じられた結果がでたことが示唆される。

総合的評価の4項目も全てで改善がみられ、最も低い評価でも「学問的興味をかきたてられた（IV3）」の3.98（昨年度は3.94）であり、「授業全体の目標が明確だった（IV2）」は4.11（昨年度は4.06）と最も高い評価であった。また「わかりやすい授業だった（IV1）」や「この授業を受けて満足した（IV4）」もそれぞれ4.05で、本学部の授業に対する学生の評価は高まっているといえる。ただし、これら総合的評価項目を学年別・規模別にみると、学年が低いほど、また講義の規模が大きくなるほど数値が下がる傾向がある。これに関して、低学年の学生や受講生数の多い授業に対する何らかの対応を引き続き検討していく必要があると思われる。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 グループ集計の分類

今回、経営学部では必修科目や自動登録科目である（BLP、BBLを除いた）「経営学入門」、「経済学入門」、「会計学入門」、「ビジネス概論A」、「ビジネス概論B」のクラスでグループ集計を行なった。これらの科目は複数教員による授業であり、結果・ノウハウを共有することで、より良い授業にしていく狙いがある。

#### 3-2 グループ集計の結果の概要

「経営学入門」のクラスは1年生向けの必修科目であるため、教育効果を意識して、同一規模の4クラスに分けている。その結果、「十分な静粛性が保たれた（II5）」に対する評価がグループ平均4.27と高く、クラス分けの効果が出ていると考えられる。その一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」や「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」に対するグループ平均の評価がそれぞれ3.28、2.96と高くなく、必修科目であっても講義内容や学問にさらなる関心を抱かせる取り組みが必要であると思われる。また、同一科目であるにもかかわらず、複数の項目で一つの科目が突出して評価が低い点が散見されるため、クラス割り振りによる影響を少なくするべく、担当教員間で情報を共有するのも有効であると考えられる。

「経済学入門」のクラスは、1名の教員が2クラスを担当した。また、「会計学入門」のクラスでは、2名の教員が合計4クラスを担当した。そのせいもあってか、基本的にはクラス間で際立った差はみられなかった。一方、「経営学入門」、「経済学入門」と比較して、「会計学入門」の授業の進め方や総合的評価に関するグループ平均評価が高かった。同じ入門科目として、会計学入門における入門クラスの教え方に関する取り組みを共有することも有益であると思われる。

「ビジネス概論A」、「ビジネス概論B」ともに、クラスによって評価のばらつきがややみられた。教員同士でその要因を共有することで、クラス間での評価の差を縮め、クラス全体での質の向上を期待したい。

## 4. 担当教員の所見票に対するまとめ

### 4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」では、評価が比較的高かった項目に対する教員自身の分析が多くみられた。具体的には、講義内容・レジュメの量の調整や講義内の静粛性の確保に関する取り組みの効果への言及がみられた。評価が低い項目については、その原因（例えば講義で早口で話し過ぎた点）や対応策（発展的な学習に向けた学生のモチベーションの向上）に関する所見がみられた。また、講義によって所見における記述の有無や詳細度にも差がみられたため、今後の検討課題としたい。

### 4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

#### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の「肯定的評価として多い意見」は、教員の丁寧な説明や教員とのコミュニケーションの機会、発言の加点（発言を促す仕組み）、授業の内容と連動した演習問題の提供、オンライン授業支援システム Blackboard の有効活用、スライドの見せ方、映像資料の活用、グループワークの活用、ゲストスピーカーの起用などに関するものであった。また、実践的な内容や、時事問題への言及に対しての肯定的な意見もみられた。また、授業環境に関して、教室内の静粛性やディスカッションに適したクラス規模に対する肯定的意見もあった。

学生の「否定的評価として多い意見」の中では、教室内での私語の多さに関する不満が目立つ。加えて、教員が話すスピードや適切な声の大きさに対する要望も多くみられた。スライドやレジュメに関しては、字が小さいといった見づらさや不適切な分量を指摘する声が多かった。授業内容に関しては、量が多い、難しすぎる、進行スピードが速いなどの意見もみられた。授業環境に関する意見として、履修者数の多さや空調管理などが挙げられた。

#### 2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

「記述による評価に対する担当教員の所見」については、学生の記述が少ない中、肯定的評価の確認や否定的評価に対する改善への言及がみられた。肯定的な評価に対しては、講義の改善による効果の確認として機能しており、授業で用いた資料や学生の接し方の効果などを継続する意見が表明された。また、「興味のある内容だった」などの学生の意見に対して、授業のさらなる向上を目指す意見もみられた。否定的評価に対しては、真摯に受け止め改善にむけて努力する意向が示されるとともに、他の学生や講義の特徴を考慮するとやむを得ないと述べるケースもあった。受講者全てのリクエストに完璧に応えることの難しさが示唆されていると思われる。

### 4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「改善に向けた今後の方針」については、例えば授業進行のスピードが速いことやスライド等の講義資料の見づらさに対する改善策が示された。教室の静粛性の確保やディスカッションに基づく双方向型講義のさらなる導入についても言及がなされた。また、学生のやる気や努力を促すために、演習問題のさらなる導入や実例などを用いた実践的な内容などを増やしてメリハリをつける方策を取り入れる意見もあり、教員側の前向きな姿勢が示されている。

## 5. 今後の改善に向けて

2019年度の評価結果をまとめると、比較的高い評価を得ており、平均では昨年度の値から改善している項目がほとんどであり、経営学部では講義の改善が着実に進んでいることがうかがえる。2019年度からは100分授業に変更されたが、これに由来するコメントはほとんどみられず、評価結果の点数が改善しているところから、10分間の授業時間の増加によるネガティブなインパクトはなかったと推測できる。

今後のさらなる改善が望まれる点として、学生の授業に対する取り組みが挙げられる。例えば、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた（I3）」、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした（I4）」はまだ改善の余地があり、授業時以外での学習時間も決して十分とは言えない。また、授業から得られたものを示す4項目のうち「自分で調べ、考える姿勢（III3）」もさらに高められるだろう。毎回出席して授業には参加している学生であっても、予習・復習・自主学習を促すしかけが必要である。この課題については、講義形式や受講生の多さが異なるため、一様に論じることは難しいが、より実践的な内容を盛り込んで学生のモチベーションを高めるとともに、演習問題や課題を通じて事前にテキストを読ませたりするなどの講義への準備を促す工夫が必要であろう。

また、学生自身から寄せられたコメント（記述による評価部分）にもしっかりと耳を傾け、講義を継続的に改善していく必要がある。教員間で講義を相互に観察する機会は乏しいため、学生による評価は、教員に講義の問題点を気付かせ、改善・発展を促すきっかけとなる。例えば、パワーポイントの活用やレジュメやスライドを印刷した資料の配布は学習にとって効果的であるが、適度な分量、見やすさへの配慮、適度な進度が求められる。双方向型の講義に加えて、学生とのディスカッションやコミュニケーションも教育効果を高めるのに有効である。相対的に少人数の講義で各評価が高いのは、それを物語っている。これまで順調に学生の評価が高まってきているので、次年度もその動きが途切れず続くことを期待したい。

## 4-7 異文化コミュニケーション学部

### 1. 科目選定方針とねらい

異文化コミュニケーション学部における2019年度授業評価アンケートは、講義科目および一部の演習科目を対象とし、1教員1科目で実施した。専門演習、実験、集中講義や実技を伴う科目は対象としなかった。また、複数教員担当科目では原則として実施しなかった。この選定方針のねらいは、各教員の授業改善という授業評価アンケートの主たる目的を達成するとともに、2019年度で一区切りを迎えた学部カリキュラムの成果を検証することにある。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

実施状況としては、実施予定であった98科目(春学期50、秋学期48)に対し全科目(100%)で実施できた。回答率は73.16%で、全学平均61.37%を超える高水準となっている。アンケートの設問項目別平均値については、以下のように概観することができる。

まず、I群の「学生側の授業に対する取り組み」(6項目)では、「I1 授業全体を通じての出席率」の平均は93.68(全学平均91.94)、「I2 この授業に積極的に参加した」は4.22(全学平均4.10)とともに高い数値を示し、学生が積極的に授業に参加したことがうかがえる。他の項目についても、学部間比較において上位に位置していることが分かる。「I6 授業時以外の学習時間」については、全学平均(1.04)を上回る1.31となっており、授業外での学習時間を確保している群に入っている。また、この数値は前回1教員1科目でのアンケートが実施された2016年度の1.10に比して増加していることが注目される。授業規模と評価の関係を見ると、50名以下の授業が出席率を除くすべての項目で最も高い数値を示しており、小規模授業においてよりよい取り組みが可能であることが見て取れる。

II群の「授業の進め方」を問う9項目では、全項目が4.00を超えた数値を示し、教員の授業の準備と運営について学生が総じて肯定的な評価を下していることがうかがえる。特に評価が高かったのは過去二年度と同様に「II9 教員は授業の準備を周到に行っていた」で、4.55の高い数値を示している。II群でも50名以下の小規模授業がそれ以上の規模の授業より高い評価を得ており、0.3~0.2ポイントの差があらわれている。とりわけ、静粛性に関しては50名以下(4.54)と51名~100名(4.05)に約0.5ポイントもの差がある。

III群の「授業から得ることができたもの」4項目では、全項目で4.00を超える比較的高い数値が示された。すべての項目について、学部間比較において上位に位置していることが分かる。過去の年度において数値の低さが指摘されてきた「III3 自分で調べ、考える姿勢」に関しても4.04(全学平均3.78)と4.00ポイントを超え、改善傾向がみられることが指摘できる(参考:2016年度3.87、2018年度3.89)。

IV群の「授業への総合的評価」4項目でも、全項目で4.2台を超える高い数値が示された。すべての項目について、学部間比較において上位に位置している。また、IV群でも50名以下の小規模授業はそれ以上の規模の授業の数値を0.2~0.3ポイント上回っている。

学年別平均値を見ると、出席率は1年生において最も高い一方、「I6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」や「III3 自分で調べ、考える姿勢」は高学年になるにつれて高くなっていることが注目される。

これまでの記述を、以下のようにまとめることができる。(1) 全学平均と比較して、学部

の授業は全体として高い評価を得ている。(2) 50名以下の小規模授業において評価が高くなる傾向が顕著である。(3) これまで課題とされてきた授業外での学生の積極的な学習に関して改善されている様子がみられる。また、大学での学びを通して積極性が増す傾向がある。

### 3. 担当教員の所見票に関するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

「授業中の手応えが確認できた」や「授業の内容や進め方も肯定的な回答が得られ、履修者が満足いく授業運営ができた」など、授業運営の努力が実を結んでいることを肯定的にとらえる声が多くみられた。このことは、アンケート結果の全体的傾向と一致していると言える。ただし、学生が評価した点、足りない指摘した点を細かく確認し、今後の発展のための課題を検証しようとする記述もある。なかでも、発展的学習（I4）に関する評価を反省し、自ら考える姿勢を育成するためのより一層の工夫を行いたいとする記述が目についた。ただし、記述からは教材や課題に関してすでに多くの工夫が行われていることが読み取ることができ、またその成果はアンケート結果にも反映されている。したがって、現状において欠けているというより、よりよいものにしていきたいという姿勢のあらわれとしてこれらの記述を読み取ることができる。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

##### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生からの肯定的な評価は、教材、小テスト、リアクションペーパー、ディスカッション、グループワーク、課題など学生の参加を促す手法の効果に関するものが目立った。これらの手法が、学生側からみて適切なやり方で行われ、そこから得られた学習効果が大きかったと感じられた場合、肯定的な評価につながっていると言える。その一方で、課題が多すぎる（あるいは少なすぎる）、グループワークやディスカッションがうまく組織されていないなど、学生側からみてうまく行われていないと感じられた場合、否定的な評価としてあらわれている。すなわち、授業参加のための工夫の有無そのものではなく、その運営のあり方が学生の関心の対象となっていると言える。また、日本語母語話者でない学生による、授業のレベルやスピードについての意見がみられた。このことは、学部学生の言語・文化的背景の多様化から生じていると考えられる。

##### 2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

改善の要望のあった授業の手法については、分量ややり方を調整することでより効果的にしていきたいとする所見がある一方で、その手法を導入する意図や手順についてより綿密に学生とコミュニケーションをとることで理解を得たいとする所見もあった。学生の言語的背景に起因する問題についても、より配慮したいとする所見とともに、学生によるより積極的な教員へのアプローチも必要である所見がみられた。いずれの場合も、教員側の授業方法の調整と、学生とのコミュニケーションを通じた共通理解の形成が両者ともに重要であることを示していると言える。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」まとめ

多くの教員が、教材、小テスト、リアクションペーパー、ディスカッション、グループワーク、課題など、現在授業で用いている手法の実施方法を調整して、より高い教育効果を生み出そうとしている。その際、日本語を母語としない履修者が増えていることを踏まえた対策を取ろうとする姿勢もみられる。また、個別の授業の改善だけでなく、関連する複数の授業の連携を強めることで各授業の学習効果を高めたい（あるいは高めるべき）という見解もみられた。

### 4. 今後の改善へ向けて

全体として、教員による工夫された授業運営が高い評価を得ていると言える。また、これまで課題としてきた点、(1) 授業外学習の促進、(2) 発展的学習の促進、(3) 自分で調べ、考える姿勢の育成について、一定の成果があらわれていると考えられる。今回のアンケート結果の分析からは、今後さらに多くの授業外学習を課すよりも、より効率的な学習のためのバランスを見出していくことによって、さらなる改善が見込まれるのではないかという展望が得られた。アンケート結果から明らかになった課題としては、第一に学生の多様化に対する対応が挙げられる。日本語を母語としない学生に、どのようにして日本語を母語とする学生を犠牲にすることなく授業内で対応していくかについて、検討の必要がある。第二点として、51～100名あるいは100名を超える規模の講義科目における授業運営が挙げられる。アンケート結果から問題があるとまでは言えないものの、50人以下の授業とは評価に開きがある。静粛性の確保を含め、検討が必要な点であろう。さらに第三点として、授業間の連携を上げることができよう。これらの点の検討によって、さらなる改善が期待できる。

## 4-8 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター

### 1. 科目選定方針とねらい

2019年度はグローバル・リベラルアーツ・プログラム（以下、GLAP）にとっては開設3年目で、GLAPの学生が基本的に3年次の秋学期から履修することになっている専攻分野別の選択科目がいっせいに開講された。学年進行により授業評価アンケートという点検の目がGLAPのカリキュラム全体へと及んでくることは、今後のカリキュラム改革の取組みのうえでも有益なことと考えている。

2019年度は1教員1科目という方針でアンケートを実施する科目が選ばれることになってきたため、新規開設科目のすべてがアンケートの対象となったわけではないが、それでも、アンケート実施科目は、2017年度の9、2018年度の11から2019年度は19へと増加した。なお、少人数教育を強く謳っているGLAPでは、各科目の履修者（他学部学生、特別外国人学生を含む）が多くても20名台にとどまっており、アンケートの回答者数が小さいため、データ利用にあたっては特に注意しなければならないことは、過去2年度と変わらない。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

2018年度のデータと比較してみると、GLAPの全科目を平均して評価が上昇した項目も下降した項目もあるが、残念ながら、全体としては下降する項目の方が多いことが見てとれる。しかしながら、学生の学修の積極性にかかわっている「I3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、「I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、「III1 自分にとって新しい考え方・発想」（が授業から得られた）、「III3 自分で調べ、考える姿勢」（が授業から得られた）といった項目については、数字が前年度を下回った場合を含めて、全学平均を大きく上回る評価が得られている。この点は、学生参加型の少人数授業に積極的に取り組んでいるGLAPの姿勢が、学生にも正しく受け止められ、支持されていることを示すものとして心強く感じられる。

逆に、2019年度に評価が低下し、全学平均を下回ることになった項目には、「II4 各回の授業内容は明確だった」、「IV1 わかりやすい授業だった」、「IV2 授業全体の目標が明確だった」、「IV4 この授業を受けて満足した」などが並んだ。これらの項目における低評価は、学生が、一方では学生参加重視のGLAPの授業スタイルを歓迎し前向きに取り組もうとしつつも、他方で、もう少し分かりやすい形での知識提供が科目担当者からなされるのを期待していることを示しているように思われ、今後のGLAPの授業改善を考える際には、無視することができない結果であると考えられる。

### 3. グループ集計にみられる結果

#### 3-1 グループ集計の分類

上記1.で述べたように、GLAPでは2019年度から専攻分野別の選択科目が開講された。GLAPの学生は、3年次の夏に自分の専攻分野（Field）を選択し、それ以後卒業までの3学期間＝完成期には、専攻分野の科目を中心に履修することになっている。専攻分野としては、Humanities、Citizenship、Businessの3つがあり、今回の授業評価アンケートにおいては、秋学期開講の分野別選択科目（Global Studies Electives；アンケートの実施対象は、各分野3科目ずつ）についてグループ集計を行った。

なお、GLAP のカリキュラムでは、例えば、Humanities 分野を選んだ学生も、自由科目として Citizenship や Business の分野の科目を履修する可能性が高くなっており、グループ集計の結果、3つの分野それぞれの科目の履修の特徴というべきものが何らか得られたとしても、それがただちに各分野における学生の学びの特徴を示すものというように言うことはできないことにはあらかじめ注意をうながしておきたい。

### 3-2 グループ集計の結果の概要

グループ集計の結果では、おおむね Humanities がもっとも高評価、Citizenship がそれに続き、Business が最下位となっていた。Humanities 3科目の平均値は、ほとんどの設問項目で他の2分野に水をあけて首位に立っており、その高評価の原因がどこにあるのかは、2019年度の3年生の中では Humanities 分野を選んだ学生がごく少数にとどまったことと考え合わせると、興味深く感じられる。

今回の集計では、Humanities よりも低い評価が出ていた Citizenship、Business の両分野の科目についても、多くの設問項目において GLAP 全体の値を上回っており、特に「Ⅲ4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」（が授業から得られた）などで高い値を示していることは、3年次秋学期以降の専攻分野に分かれての学修では、3分野いずれであれ、自らの意思で履修科目を選んで学びを深める学生の姿が見え始めている証とも見られうるように思われる。

## 4. 担当教員の所見票に対するまとめ

### 4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

GLAP 開設科目に関する履修学生による授業評価のデータは、「2. 集計データにみられる結果のまとめ」での記述からも分かるように、2018年度よりも低下するところがあったものの、全体としては高い水準を維持していると考えられる。そのような評価の数字を受けての個々の科目の担当教員の所見においても、多くは、各科目の授業の基本方針が学生に受け入れられたことを歓迎しつつ、評価が相対的に低かった部分について問題点の所在を確認している。所見の中には、その問題点の確認を今後の授業改善の工夫につないでいくことを明言しているものも認められた。

### 4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

#### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生の記述意見についても、数字による評価と同じく、学生参加型の授業をめざす GLAP 科目の取組みが肯定的に受け止められていると感じられるものが多かった。改善すべき点の記述でも、そうした取組みの微調整（各回の授業のねらいのいっそうの明確化、課題の難易度の調整、課題文献提供のし方の改善、授業における討論部分と講義部分の割合変更など）によって、より大きな効果が期待できるといった趣旨のものが相当数にのぼった。

#### 2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

教員の所見では、上述の学生の基本的に前向きな意見を受けて、学生の意見も踏まえてさらに授業改善をはかりたいとするのが基本傾向である。

#### 4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「授業評価に対する担当教員の所見」、「記述による評価に対する担当教員の所見」での記載を受けて、現状に即した授業運営方法の工夫を行うという声が多く見られた。

#### 5. 今後の改善に向けて

2018年度の報告書の本欄においては、2019年度から新たに週1回2単位の専攻分野別選択科目が開かれるのをを受けて、それらの科目を点検することを2019年度の課題として挙げていたが、その課題については、3つの専攻分野ごとの科目のグループ集計という手法の利用も含めて、今回の報告書では特に丁寧に取り組んだところである。幸い、2019年度の新設科目に対するアンケートの評価は概して良好であった。

2017年度開設のGLAPは、完成年次である2020年度末に第1期の卒業生を送り出した後、2021年度には、この学生による授業評価アンケートの結果も検討材料の非常に重要な一部として用いながら、カリキュラムの全体（すべての開講科目）を対象とした点検活動を初めて行うことになる。この点検活動を通じて、カリキュラム（科目編成）の改革とともに、個々の科目の授業改善を積極的に考えていきたい。

## 4-9 観光学部

### 1. 科目選定方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を設定した。

- (1) 学部等ごとに1教員1科目で実施する。
- (2) 専門演習、実験、実技を伴う科目は対象としない。
- (3) 複数教員担当科目は原則として対象としない。
- (4) 集中講義は対象としない。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

1教員1科目で実施した2019年度は、実施科目数が96科目(2018年度は47科目)、回答者数は9,171名(同4,079名)であった。回答者の内訳は、1年次生が25.3%、2年次生が31.3%、3年次生が33.7%、4年次生が8.1%であった。

授業の進め方に関する設問Ⅱ1~Ⅱ9(「該当しない」が約57%に達する設問Ⅱ7を除く)に対して、78.3%~87.5%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答し、なかでも設問Ⅱ9「教員は授業の準備を周到に行っていた」に対しては、57.2%が「大いにそう思う」と回答しており、「そう思う」と合わせると87.5%と非常に高い数値となっている。さらに、総合的な評価に関する設問Ⅳ1~Ⅳ4に対して74.5%~80.1%が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答している。これらの結果から、学生が授業の進め方に関して高く評価しており、授業に概ね満足していることが読み取れる。

一方、授業への取り組み方に関する設問Ⅰのうち、設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」と設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」に対して、「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生は、いずれも50%程度にとどまっている(ただし2016年度の40%台から遡増)。このことは、設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」については、「0時間」または「1時間未満」と回答した学生が約2/3いることの反映であり、学生自身がこのことを自覚している様子が読み取れる。学生が授業時以外の学習時間を持つ意識が醸成されていない状況は、設問Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」に対して「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した学生が63.5%に留まり、設問Ⅲの他の設問と比較すると20ポイント程度低いことから伺える(ただし2016年度の約55%からは増加している)。一方、設問Ⅰ1「授業全体を通じての出席率」で、全体の70%の学生が「90%以上」、25.2%の学生が「70-89%」の出席率と回答していることから、まじめに授業に出席して専ら教室で学ぼうとする真摯な姿勢は見て取れる。また、授業から得ることができたものとして、設問Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」は79.7%、設問Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」は80.1%の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答しており、授業を通して学びを深めていることが分かる。

学科別の結果(平均値)を比較すると、全体として学科間の差異はあまりみられなかった。最も大きな差異は設問Ⅰ6「授業時以外に学習した時間」であり、その平均値は観光学科が0.95、交流文化学科が0.84と、学科間の差異は0.11ポイントにすぎなかった。他に、設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」が観光学科3.49、交流文化学科3.39、設問Ⅱ2「各回の授業内容の量が適切だった」は観光学科4.14、交流文化学科4.24であっ

た。授業規模別の平均値の結果を見ると、全学および観光学部ともに大規模化に伴って評価点が低下する特徴がみられ、設問Ⅱ5「十分な静肅性が保たれた」の「50名以下」と「151名以上」の差異が最も顕著である。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

教員は授業準備について映像視覚教材や配付資料等の工夫を行っており、そのことが評価されていると捉えている所見がみられる。大人数科目も同様であり、この工夫が授業規模別の平均値の差異となって現れている可能性がある。全体的に授業運営について概ね高評価となっていることに対して好意的に受け止め、また励みになっているとの記入が多い。

一方、設問Ⅰ3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、設問Ⅰ4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、設問Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」が概ね低調であることを受けた所見が見受けられた。これは授業受講に対して受け身となっている学生が多いことを反映したものとも考えられ、教員側にも能動的な学習を引き出せなかったとの意見が散見される。これらの課題は、上述のとおり全体に横たわる傾向ではあるものの、個々の授業から取り組むべき課題であるということもでき、多くの教員もこの点の認識を強く示している。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

##### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

昨年度までと同様、全体としては肯定的評価も否定的評価も基本的にはテクニカルな内容が中心であり、参加型・対話型の授業、具体例を通した説明の工夫、配布資料の工夫、コメントペーパーへの対応、ゲストスピーカーの活用などについては総じて肯定的意見が多くみられる。また、肯定的評価とされる記述の多くに「…わかりやすかった」、「…面白かった」、「…楽しかった」等の表現がみられ、学生が授業から興味をかき立てられ、そのことが授業内容の理解や集中力の維持に繋がっていると考えられる。

否定的評価とされる記述についても昨年度までと同様、内容・表現に粗雑なものが多く見受けられるとともに、教室で担当教員に直接申し出ることによって、その授業の実施中に改善または解決できる性質のものである（たとえば「声が聞き取りにくい」、「文字が小さい」、「パワーポイントのスピードが速い」など）。一方、教室の静肅性が保たれていない場合には、不規則な私語は周囲の学生の学習の権利を奪う行為であることを、教員が厳しく警告する必要がある。しかし、教員が授業を進めながら同時に学生の学習環境維持のためにどの程度の労力をさくべきか、判断が難しいところでもある。SAの活用への要望もあり、今後学部全体として環境維持のための取り組みを多様な形で検討していくことが必要である。また、一部に授業時間外の作業に対する否定的評価があったが、これについては単位には授業時間外の学習が含まれることを学生にしっかり認識させる必要がある。

##### 2) 上記1) に対する担当教員の所見のまとめ

記述による評価への記載は個別的であるが、基本的には学生からの要望を真摯に受け止め今後の改善につなげようという所見がほとんどであった。授業評価と記述による評価を

もとにした、きめ細やかな対応に向けた各教員の継続的取り組みの姿勢が読み取れる。しかし、記述による評価においては正反対の意見・要望があることから、授業の枠組み・位置づけ、配当年次、教室サイズ等に応じて、授業方法を柔軟に組み立てることもまた求められるようである。

大人数科目については照明やマイク等機器についての改善の提案もあり、教員の努力の他にも対応できる余地はあるとみられる。このことについては施設担当部署と協議しながら、教員の授業運営の妨げにならないよう図っていく必要があるものとする。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

全体として、寄せられた意見を活かしながら、次年度以降もより効果的な授業運営を行っていきたいとの意見がほとんどである。パワーポイントや配付資料、コメントペーパーや課題の出題、あるいはそれらのフィードバックなど、細やかな対応を図ろうとしていることがうかがえ、この積み重ねが授業準備に対する学生の高評価に結びついていると考えられる。

また、様々な学年の学生が履修している授業では、その学年に応じて授業に対する姿勢や理解度が異なっていることが示されており、年次の低い学生に理解させる努力を図りつつ、年次の高い学生の興味を継続させるような工夫が必要との意見もみられた。このことについては個々の教員が本アンケート結果を参考にしながら授業運営を工夫・改善していくだけでなく、学部全体で意見の共有化を図りカリキュラム編成、履修モデルの提示など改善を検討する必要もあるものとする。

## 4. 今後の改善に向けて

これまでも本欄では「授業時以外の学習時間を確保できるような意識と生活を身につけるよう誘導する」ための工夫について述べられてきているが、そのためにはできるだけ学生と近い距離の中で「自分で調べ、考える姿勢」が身につけられるよう、「教えすぎない」「疑問を残す」など、時にはよい意味で「わかりにくい」テーマを取り入れる工夫など様々な余韻を含んだ授業実施が求められる。大人数講義のスタイルで、年次も様々な学生個々に対応していくことの困難さは教員すべてが抱えている課題である。授業時間内で必要最低限の情報を伝えつつ、授業時間外にどのような学習を实践すべきかを課題の出題や配付資料の作り込み、あるいは別の方法で提示するなどを、科目の内容と照らし合わせながら様々に行っていくことが必要であろう。学生を取り巻く社会状況、あるいは大学入学までの中等教育が変化する中、授業に出席し、卒業に必要な単位を取得することのみでは、大学が伝えようとする学術研究の豊かさや深さを充分獲得できないことを、学生に繰り返し丁寧に伝えていく必要がある。

## 4-10 コミュニティ福祉学部

### 1. 科目選定方針とねらい

2019年度における科目選定方針は、以下の通りである。

- (1) 学部等ごとに1教員1科目とする。
- (2) 専門演習、実験、集中講義や実技を伴う科目は対象外とする。
- (3) 複数教員担当科目では原則として実施しない。

この結果、今年度は123科目において、授業評価アンケートが実施された。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

#### 2-1 全体集計にみられる結果

学部全体の集計データと、全学の集計データの結果を比較した結果、全設問項目23の中で、平均値において0.05以上の開きがあった設問項目は以下の2つであり、双方ともに、設問項目群「I この授業へのあなたの取り組み方について…」のものであった。まず、「I 1 授業全体を通じての出席率」において、コミュニティ福祉学部（以下、コミ福）が92.15、全学が91.94となっており、コミ福が+0.21ということになる。次に、「I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」において、コミ福が0.89、全学が1.04となっており、コミ福が-0.15ということになる。II～IVの設問項目群（「II この授業の進め方は…」「III この授業から得ることができたもの」「IV 総合的にみてこの授業は…」）では、コミ福と全学の平均値が0.05以上乖離したものは皆無であった。以上から、コミ福は出席率が比較的高いものの、授業時以外の学習時間がやや低いという傾向があるが、全体的には全学の傾向とほぼ一致していると言える。

コミ福が全学に対して-0.15である上記「I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」については、コミ福における過去の年度と比較した。もちろん各年度の対象科目等が異なるため、単純な比較はできないが、その結果は以下の通りである。2015年度には0.90、2016年度0.91だったものが、2017年度0.86、さらに2018年度0.83と低下した。だが、2019年度には0.89と上昇し、盛り返しをみせたということなる。なお、この「I 6」は、従来からの懸案事項であった、学生自身の主体的学習態度の涵養という点にも関わる。これに関連して課題となっていた2つの設問項目について、以下の通り数値が改善されたことが分かった。第一に、「I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」は、2015年度3.29→2016年度3.34→2017年度3.31→2018年度3.29と低下傾向にあったが、2019年度は3.43とかなり上昇した。第二に、「III 3 自分で調べ、考える姿勢」は、2015年度3.61→2016年度3.62→2017年度3.63→2018年度3.63と横ばいで推移していたが、2019年度は3.74とかなり上昇した。以上から、2015年度以降のFD活動や学部全体における情報交換等、各教員の創意工夫や努力が、数値の上昇という形で現れたものと思われる。ただし他方で、2019年度に上昇をみせた上記2項目（「I 4」「III 3」）ともに、全学平均と比較すると-0.04となっているために、これまでの方向性をさらに一層推し進めていくことが必要であろう。

## 2-2 学科等別集計にみられる結果

3 学科の比較で、各学科が優位であったものは概ね以下の通りである。福祉学科では、授業の内容と形式、満足度に対する評価（Ⅱ～Ⅳ）が殆どの項目において高い傾向にあった。コミュニティ政策学科では、学生の出席率と授業外学習に関する数値が高い傾向にあった。スポーツウエルネス学科では、学生の授業準備や積極的参加、発展的学習に関する数値が高い傾向にあった。学科の専門性や学生の性向が異なるために単純に比較することはできないが、各学科の高い項目に関して、教員の努力や工夫、学生の様子や傾向等について情報交換・共有しながら、学部全体における教育の一層の発展に繋げていくことが重要となつてこよう。

## 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

全体的には評価結果を「概ね妥当な評価」として真摯に受け止めて、丁寧なコメントをしていたと思われる。また、授業内容や形式は多岐にわたるが、授業外学習が相対的に低い点を課題ととらえたコメントが多かった。この点については、学生の自主性に委ねるだけでなく、予復習を課題として出すことを考えているというコメントもあった。ただし他方で、課題とした故に学生が二極化（積極的な学生／負担に感じて益々消極的になる学生）してしまったというコメントもみられたので、難しい問題であると考えられる。

### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の評価が高かったこととして以下の点を挙げる教員が多かった。それは、ゲストスピーカーの招聘、視覚教材や図表の使用である。また、リアクションペーパーや質問等に対するフィードバックの重要性を改めて実感したとの声が多々あった一方で、授業規模によってはその対応が難しいことを指摘する意見もあった。その中に、授業時にはなく、オンライン授業支援システム Blackboard へ回答等をアップする方法が紹介されており、この点は参考にできるとと思われる。

最後に以下の点を挙げておく。授業は導入的な内容のものから、かなり専門的な内容や用語を含むものまで多岐にわたるが、特に後者において分かりやすい説明を心掛けるとのコメントがみられていた。自由記述は必ずしも多いわけではないが、教員が丁寧にコメント、対応している様子がうかがい知れた。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

基本的には例年通り、①より理解しやすい授業を目指すこと、②主体的に学べる環境を創ること、③授業外学習を促すこと、という観点から授業内容及び教授法のさらなる改善を図ろうとする意見が大半であった。またそのために、グループワークやワークショップ的なことを採り入れる、質疑応答を工夫する等、具体的な取り組みも示されている。だが他方で、授業形態や内容は千差万別であるために、必ずしも普遍的な解決方法があるわけではないのも事実であろう。

#### 4. 今後の改善に向けて

例年同様、本年度も各教員による授業評価アンケートに対する真摯なコメントが数多く寄せられている。この内容を学部全体で共有化し、積極的に活用していく必要があると考えられる。

授業時の私語に対する取り組みにみられるように、学部全体の改善活動が徐々に成果を結んだと考えられる事例もあった。だが、学生の主体的な学習や授業外学習についてはまだ課題と感じている教員が多い。ただし他方で、「2-1」で言及したように、例年の課題であった2点（「I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」「III3 自分で調べ、考える姿勢」）については数値の上昇がみられた。つまりは、改善されつつあることが示された。学部におけるFD活動や個々の教員の努力等による成果であると考えられるため、今後もその方向性を引き継いでいくことが求められよう。なお、最後に記しておくが、学生及び教員のコメントで、「教員の話し方・声量等」に関するものが少なくなかったことが特筆すべき点として挙げられる。話し方や声の大小等は、各教員のパーソナリティにも関わるものであるために、学生の要望に対して全て応えるのは難しい。だが他方で、そのようなコメントが少ないことは事実なので（普遍的な対策はあり得ない、あるいは講じる必要がない場合もあるが）、この点について教員間で共有しておくことは重要であると思われる。

以上ここまで授業評価アンケートに関する総評を述べてきた。当アンケートは学生の声反映される貴重な資料である。今後も引き続き授業評価アンケートの貴重な意見を活用し、学生を取り巻く環境にも目を向けながら、現実的で実効性が期待できる改善方策を開発すべく努めていく必要があるだろう。

## 4-1-1 現代心理学部

### 1. 科目選定方針とねらい

各学部1教員1科目という基本方針のもと、心理学科・映像身体学科のそれぞれにつき、学科内の科目カテゴリーのバランスに配慮しつつ、81科目を選定した（春学期36、秋学期45）。なお、「演習科目」「実験科目」及び「複数教員担当科目」は、原則として実施対象外とした。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

#### 回答率

71.61%は全学平均61.37%に比して1割程度高い。データの信頼性と、学生の本アンケートに対する前向きな姿勢とを示すといえよう。

#### I：この授業へのあなたの取り組み方について…

「I1 授業への出席率」が93.11%（全学平均91.94%）。その他おおむね全学と同程度だが、「I6 授業時以外の学習時間」0.80時間は全学平均1.04時間より目立って低い（全学部中で最低）。いずれも例年の傾向である。授業には真面目に参加するが自主的な学びの姿勢に弱さを抱えるという、本学部学生の特徴が見て取れる。

#### II：この授業の進め方は…

全体的に全学平均より0.1ポイント程度良い数字が出ており、担当教員と授業方法に対して総じて良い評価がされている。

#### III：この授業から得ることができたもの

「III1 自分にとって新しい考え方・発想」、「III2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」が、全学平均より0.1ポイント程度高い。例年の傾向であり、本学部では学生が専門分野と良い出会いを果たしていると言えるだろう。

#### IV：総合的にみて、この授業は…

全項目とも全学平均より0.1ポイント程度高い。学生の評価を通じて浮かび上がる本学部の授業は、総じて良好に運営されていると判断できる。

#### 学科別データ、学年別データ、授業規模別データ

学科ごとにみたとき、全体にわたって心理学科の数字が高く、映像身体学科の数字が低い傾向がある。学年別データにおいて特徴的な傾向は、学部による授業環境に関する質問について、学年進行と共に学生の評価が下がっていることである（他の質問項目は逆の傾向）。授業規模別データで特に気になる特徴はない。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業に対する評価が全般的に高いことを反映して、ほとんどの担当教員が、自分の授業のやり方に手応えを感じていることを所見として述べている。全体に、心理学科の担当教員が詳しい所見を述べる一方で、映像身体学科の兼任講師に所見未記入が目立った（以下の項目も同様）。

### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

#### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

学生からの肯定的なコメントとしては、視聴覚教材、配布資料、教員からのリアクション、アクティブ・ラーニング、ゲストスピーカー等に対するものが多かったようだ。一方で否定的なコメントは、教室環境や授業の静粛性に対するものが多かったことがわかる。その他、要望として、「話すスピードが速すぎる」等のリーズナブルなものがある一方で、「マニアックすぎる」「資料を教室配布だけでなくオンライン授業支援システム Blackboard にあげてほしい (=出席しなくても入手できるようにしてほしい)」といった、自己都合によるものもあったようだ。

#### 2) 上記 1) に対する担当教員の所見のまとめ

教室環境については、教員自身には如何ともしがたく、「教務事務センターに伝えてほしい」というように困惑したコメントもみられた。その他、静粛性の維持や話すスピードなどについてのリーズナブルな要望については、反省して来年度の改善の材料にするという前向きな所見が多かった。一方で、学生の我が儘とも思われる要望については、学生に反論したい気持ちを所見欄にこめたというような例がみられた。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

教員それぞれに次年度に向けた具体的な方策を述べていた。複数の教員があげていた改善方針として、(1)「授業外での勉強」の数値を気に掛けて、宿題の出し方などを課題としてあげる、(2) 100分授業化に伴う時間の使い方を反省して、その改善を課題としてあげる、(3) 手応えを感じた方法（アクティブ・ラーニング等）をさらに推進することを課題としてあげる、等がみられた。

## 4. 今後の改善に向けて

集計データの検討から、本学部の課題を三つあげる。まずは学生を授業外の主体的な学習へと導くことである。これは 2018 年度にも指摘されている。その時点で「授業内課題の工夫」「ゲストスピーカーの活用」「グループワークの導入」「過年度分も含めた授業評価アンケートの結果を参考にした効果の検証」等の取り組みが個別におこなわれていることも確認されているが、引き続きの課題である。

次に、授業環境に関する評価が学年進行と共に下がる問題について。念のため指摘しておく、学生の評価が一番下がる 4 年次においても、その評価の数値自体は他の評価項目の数値と大差はない。初年次の評価が著しく高いための現象である。とはいえ、この傾向の理由を分析する必要はあるだろう。

最後に、学科間の評価差について。映像身体学科は学問の成り立ちが新しく、心理学科に比して専門知識の体系性の面で学生に与える印象に差が出るのはやむを得ない面もある。たとえば「II3 授業のねらいの明確性」、「II4 授業内容の明確性」のような評価項目がそれにあたる。しかし、「II6 教材の効果」、「II7 板書が適切」のような評価項目において 0.3 ポイント程度の評価の差が出ることは、映像身体学科が FD 等を通じて解決すべき課題であろう。

担当教員の所見票にみられる諸課題については、個別に各教員が真摯に向き合ってくれており、信頼してお任せしたい。ただし、教室環境への学生の不満は大学が解決すべきだろう。

## 4-12 全学共通カリキュラム運営センター

### 1. 科目選定方針とねらい

2019年度の全学共通科目では、

- (1) 総合系科目「学びの精神」(FH)
- (2) 総合系科目「多彩な学び」の以下5カテゴリにおける講義系科目(コラボレーション科目を含む)
  - ①人間の探究(FA)、②社会への視点(FB)、③芸術・文化への招待(FC)、
  - ④心身への着目(FD)、⑤自然の理解(FE))

を対象に1教員1科目、また、これらに追加して「立教ゼミナール発展編」の全科目

- (3) 総合系科目「多彩な学び：⑥知識の現場(FV)」におけるグローバル教育センターが提供する全科目

を対象に、授業評価アンケートを実施した。実施合計は360科目であった。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

今年度(2019年度)の全学共通科目の「履修者数」は延べ41,618名であり、これは「学部等別履修者数」からみると全13学部等のなかで1位である。昨年度(2018年度)の「履修者数」が41,131名であり、今年度も487名の純増となった。今後も「学部等別履修者数」での順位、そして「履修者数」そのものの増加傾向は継続すると考えられる。但し、「回答者数」では27,281名(1年:10,843名、2年:7,662名、3年:5,596名、4年:2,369名、その他:811名)と、昨年度の27,351名から70名の純減である。今年度の「回答率」65.55%という結果は、昨年度の66.50%よりも若干ではあるが後退しており、全学平均の61.37%を上回っているものの、全13学部等のなかでは8番目と低位に付けている。「回答者数」および「回答率」の向上へのさらなる改善努力が求められる。

つづいて、昨年度との比較を中心に、今年度の全学共通科目の「設問項目別平均値」から読み取れる内容について以下に列記する。

「この授業へのあなたの取り組み方について…(I)」では、「授業全体を通じての出席率(I1)」を除いた、残りすべての設問項目において、今年度の数値は昨年度を上回る結果となった。なかでも、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした(I4)」における平均値の伸びが大きかった。昨年度3.31であった数値が、今年度は3.41へと改善した背景には、教員・学生双方の地道な努力の成果が想像できる。しかし、平均値の数値そのものでは、今年度も「授業をきっかけにして発展的な勉強をした(I4)」が3.41と最も小さく、これはすべての「設問項目別平均値」のなかでも最小値であった。改善の傾向は認められるものの、改善の余地も十分に残されている、ということである。学生側・教員側のさらなる努力が期待される。

「この授業の進め方は…(II)」では、すべての設問項目において、今年度の数値は昨年度を上回る結果となった。今年度も、「教員は授業の準備を周到に行っていた(II9)」の数値が4.43と最も大きく、これはすべての「設問項目別平均値」のなかでも最大値であった。これに対して、昨年度より改善はしつつも3.94と数値そのものが振るわなかったのは、「板書のしかたが適切だった(II7)」であった。教員側のさらなる改善努力が求められよう。

「この授業から得ることができたもの(III)」でも、すべての設問項目において、今年度

の数値は昨年度を上回る結果となった。なかでも、「自分で調べ、考える姿勢 (Ⅲ3)」における平均値の伸びが大きく、昨年度 3.62 から今年度 3.73 と着実な改善が見て取れる。但し、数値そのものは依然として低いことも事実であり、単に授業内容の「基本的な専門知識」を正しく理解する・させることだけでなく、授業内容から得た「新しい考え方・発想」をもう一步踏み込んで応用する・させることについて、学生側・教員側ともに、より一層の努力が求められているといえよう。

「総合的にみて、この授業は… (Ⅳ)」の今年度の数値も、総じて昨年度を上回る結果となった。昨年度との具体的な数値を比較すると、今年度の数値の伸びは、たしかに僅かではある。しかし、微増であるにせよ、学生側の満足度を押し上げている中身とは、受講する学生側の気持ちを汲み取ろうとする教員側の努力である。さらなる改善を期待したい。

「学部等による設問 (Ⅴ)」についても、今年度の数値はすべて昨年度を上回る結果となっている。昨年度同様、「この授業の教室の大きさは適切だった (Ⅴ1)」や「この授業の受講者数は適切だった (Ⅴ2)」、「この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった (Ⅴ3)」において、平均値の伸びは決して大きくはないが、教務事務をはじめ大学側の地道な努力を今年度も確認できる。

最後に、分析の視点を変え、今年度の全学共通科目データを俯瞰し、その特徴を明らかにしたい。

まずは「カテゴリ」に細分化し、それぞれの平均値を比較したい。ここで目を引くのは、「知識の現場 (Ⅵ)」における全般的な平均値の高さである。なかでも、「この授業の教室の大きさは適切だった (Ⅴ1)」では 4.86、「この授業の受講者数は適切だった (Ⅴ2)」では 4.89、「この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった (Ⅴ3)」では 4.85 と、平均値の数値そのものが非常に高いことがわかる。

次に「授業規模別」に細分化し、それぞれの平均値を比較すると、「この授業へのあなたの取り組み方について… (Ⅰ)」では、昨年度同様に今年度も、「50 名以下」および「151 名以上」の平均値が高く、逆に「51~100 名」および「101~150 名」の数値が低い、という傾向にある。この凹型傾向は、「この授業の進め方は… (Ⅱ)」や「この授業から得ることができたもの (Ⅲ)」、「総合的にみて、この授業は… (Ⅳ)」においても同様に確認できる。但し、「学部等による設問 (Ⅴ)」での教室環境・設備に関する設問項目では、一転して「50 名以下」から順に、規模が大きくなるほど平均値が下がる傾向にあり、前述した凹型傾向との整合性に欠ける結果となっている。

最後に「学年別」に細分化し、それぞれの平均値を比較すると、昨年度同様に今年度も、全般的に「4 年」の平均値が高いことがわかる。但し、学年が上がるごとに数値が上昇している項目もあれば、そうした傾向が当てはまらない項目もある。たとえば、「学問的興味をかきたてられた (Ⅳ3)」では、「1 年」 4.02、「2 年」 4.07、「3 年」 4.08、「4 年」 4.23 と、学年が上がるごとに数値も上昇しているが、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた (Ⅰ3)」では、「1 年」 3.52、「2 年」 3.58、「3 年」 3.55、「4 年」 3.55 と、必ずしも学年と平均値の上昇が連動しない。

以上、今年度の全学共通科目の大まかな特徴として、①「カテゴリ」の視点からは「知識の現場 (Ⅵ)」の平均値の高さ、②「授業規模」の視点からは中規模授業（「51~100 名」および「101~150 名」）の平均値の低さ、③「学年」の視点からは「4 年」の平均値の高さ、

がそれぞれ明らかにされた。

①については「3. 各カテゴリの総評」において、後ほど詳しく分析がなされるため割愛したい。また、②については、より詳細な実態調査が必要となろう。単に収容人数だけでなく、中規模教室特有の問題が影響を与えている可能性がある。教室ごとの個別事情が原因と考えられる場合には、教員や学生の声に耳を傾けながらの対応が求められる。引き続き、より詳しいデータ収集と個別分析が必要である。最後に③については、昨年度同様に今年度も、学生側の基盤的素養の醸成とともに、授業内容（学問）への理解度と満足度も連動して向上する、という結論に至った。学生の学年が上がるにつれ、総じて「授業内容の量」や「授業のねらい」をよりよく受容できるようになり、また「基本的な専門知識」や「新しい考え方・発想」をよりよく理解できるようになる、ということであろう。しかしながら、そうした学生側の成長をよりよく促すためにも、教員側の創意工夫はもとより、教務事務をはじめ大学側の努力もまた必須である。

### 3. 各カテゴリの総評

#### 3-1 学びの精神 (FH)

4年目を迎えた1年次生対象の「学びの精神」は、大学での学びのスキルを身に付け、主体的に学ぶ姿勢を養い、立教生として居場所感を醸成することを目的としている。「授業時以外での学習時間 (I 6)」は、初年度の2016年度は0.68時間と少なく、学びの精神の趣旨が徹底されていないのではないかと懸念されたが、2017年度の0.75時間、2018年度の0.78時間、そして2019年度の0.84時間と順調に増加傾向にある。しかし、全学部の1年次生の結果(1.03時間)や、全学共通科目の1年次生の結果(0.90時間)と比べると学習時間はまだ少なく、さらなる工夫が必要であろう。授業の進め方(II)については、おおむね4以上の評価を得ている。引き続き科目担当者には、授業補助者を積極的に活用していただくなどして、科目群の趣旨に沿った授業運営を期待したい。

授業から得ることができたもの(III)については、「自分にとって新しい考え方・発想(III 1)」の結果は4.11であるが、それ以外は4に至っていない。とりわけ「自分で調べ、考える姿勢(III 3)」の結果(3.62)は、1年次生の全学共通科目の結果(3.70)よりもやや低い数値にとどまっている。学びの精神の科目群は、主体的に学ぶ姿勢を身に付けてもらうことを目的としているため、さらなる改善を期待したい。総合評価(IV)のうち、授業満足度(IV 4)は、2017年度は3.96であったものが、2018年度は3.93に後退し、続く2019年度は4.06に躍進した。「学びの精神」と同じ授業形態の「多彩な学び1~5」の結果(4.10~4.31)や全学共通科目1年次生の結果(4.12)と比べると少し見劣りするものの、一定の評価は受けていると思われる。

「高校と大学の学びの違いを感じた(V 4)」については4.19と高い評価を受けているが、「大学で学ぶ心構えができた(V 5)」についてはそれよりも0.23ポイント低い評価であったことは例年の傾向を踏襲しており、2019年度も、高校との学びの違いは分かったが、大学で学ぶ心構えができたとまでは言えないと感じている学生が多いことを示している。「学びの精神」を履修した1年次生が、秋学期以降に自信をもって大学での学びを実践できるようになることを期待したい。

RIKKYO Learning Styleは2020年度から5年目に入った。1年次に履修した「学びの

精神」がその後の学びにどのような影響を与えるのか、卒業時に振り返ってみて「学びの精神」が役立ったと感じているのかなどを問うことで、検証していく必要があるだろう。

### 3-2 多彩な学び

#### 1) 人間の探究 (FA)

「人間の探究(FA)」を他のカテゴリと比較すると、全般的に若干数値が低いようである。顕著な差ではなく、絶対値としてまずまずではあるから、単年度の数字から判断せず、来年度以降の推移を注視したい。項目別にみると、授業への取り組み方(I)では、授業をきっかけとして発展的な勉強をした(I4)が、2019年度は他のカテゴリより相対的に落ちたようである。また、シラバス(I5)があまり役に立っていないことは前年通りである。授業の進め方(II)では、(II1)から(II9)までの項目がいずれも他の多彩な学びのカテゴリよりも低くなっている。やや授業準備が足りないと判断されているようである。ただし、教員は授業の準備を周到に行っていた(II9)は、絶対値で見れば4.38と低くはなく、わずかであるが前年度より上がっている。同様に、授業から得ることができたもの(III)は、(III1)から(III4)まで他のカテゴリよりも低くなっている。これらのことから、講義内容が豊かであっても、シラバスでの紹介や授業方法に工夫の余地があるといえるかもしれない。このため総合的な評価(IV)も相対的に低くなっている。ただしこれは絶対的なものというよりも他のカテゴリと比べた場合の相対的な位置づけであり、数値そのものは全学の平均値近辺であり、決して悪くはない。

所見票では、各科目担当者が学生の意見に耳を傾け、対応・改善に努めており、一定の成果がみられることがうかがわれる。具体的には、パワーポイントや映像資料が効果的で興味関心を喚起できるようになった、リアクションペーパーを通じて質疑応答をして双方向性を広げられたといった所見がみられた。なお教室の広狭について、兼任講師の方から「授業者にとって学生の顔が見えてちょうどよいと感じていても、学生にとってはもっとスペースがあった方がよかった」という指摘があった。このように、学習環境などについて、受講生と科目担当者の認識が同じでないことがあり、科目担当者の認識にも教育上の根拠がある場合があることは、アンケート結果を参照するうえで踏まえておきたい。

#### 2) 社会への視点 (FB)

「社会への視点(FB)」は計62科目に対してアンケートが行われた。点数評価の結果を総じて見た場合、過半数の項目において全学共通科目の平均値を超えており、まずまずの結果となっている。なかでも、授業を通じて得られたものとして「自分で調べ、考える姿勢(III3)」や「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味(III4)」を挙げる学生が相対的に多いようだ。このことは、「社会への視点」というカテゴリの基本的性格ともよく整合するものだと言える。カテゴリの有する方向性がきちんと数値に現れているという意味で、積極的に評価してよいのではないか。他方で注意すべきポイントとしては、前回・前々回と同様に今回も「授業全体を通しての出席率(I1)」が全学共通科目の平均値を下回ってしまった。また全学共通科目に独自の設定項目である「この授業の教室の大きさは適切だった(V1)」「この授業の受講者数は適切だった(V2)」「この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった(V3)」の3項目についても、2018年度に続

き平均を下回る結果となっている。これらの年度を跨いだ傾向については、今後何らかの対策が必要かもしれない。

つづいて所見票だが、科目担当者の記述からはさまざまな改善・工夫の努力が読み取れる。それぞれの授業にはその内容に応じた独自の問題点・課題点があると拝察するが、そうした諸点に果敢に取り組まれている教員各位の努力に敬意を表したい。ただ、(先のV1～3の数値とも関係するが)教室内の物理的環境や受講人数の調整など教員個人の力ではどうにもならない問題もあるようだ。これらについては、大学全体としての対策・取り組みが期待される。

### 3) 芸術・文化への招待 (FC)

「芸術・文化への招待 (FC)」を他のカテゴリと比較すると、授業への取り組み方 (I) では、(I1) から (I6) までいずれも平均的で、顕著な特徴はみられない。授業の進め方 (II) でも、ほとんどの項目で全カテゴリのなかで中程にあるが、静肅性 (II5) だけは「知識の現場 (FV)」よりも高く、目を引く。今年度限りのことかどうか、次年度以降の数値を注視したい。一方、授業から得ることができたもの (III) では、(III2) から (III4) まで平均より低くなっている。これらは突出したものではないが、現代に通じる普遍的な意味 (III4) に限っては「多彩な学び」のなかで最も低い。これは、このカテゴリの多くの科目が扱う時代の傾向を反映したものかもしれない。全体として、昨年同様「人間の探究 (FA)」に近い数値の項目が多くみられたが、総合的な評価 (IV) では、4項目とも 0.1 ポイント以上高い。

所見票は、長文のものが多くみられ、学生からのフィードバックに真摯に向き合っていることがうかがわれる。例えば、一方向の講義形式から対話形式への移行を行いたいという所見や、講義ペースを調整していきたいという所見がみられた。なかにはパワーポイントが「文字ばかり」というコメントと、「写真が多い」という逆のコメントがあり、対応の難しさを述べる所見もあった。このほか、私語や授業中の出入りを問題とする指摘が散見され、なかには「学期途中で辞めてもいいと思うほど辛い授業だった」という所見があった。こうした点は、大学全体で制度的な対応が必要であろう。

### 4) 心身への着目 (FD)

「心身への着目 (FD)」は 33 科目でアンケートが実施され、2019 年度の回答者数は 3,362 名であった。I～V の設問でほぼ全学共通科目の平均を上回る結果となった。特に設問 IV の総合評価においては、昨年度を上回る 4.22～4.36 という高い評価を得たことは、授業内容が適切で効果的に授業運営がなされていたことや、科目担当者の努力が認められた結果と判断できる。

各設問項目を見ていくと、まず授業への取り組み方 (I) では、他カテゴリと比べてシラバスの有効性 (I5) が唯一 4 点台を獲得していることに注目できる。シラバスによる授業紹介、あるいは、講義への準備・心構えへの示唆が魅力的に記載されており、それが授業の出席率 (I1) や積極的な参加 (I2) の高得点化に貢献したと考えられる。一方で、授業の準備 (I3) や授業をきっかけとして発展的な勉強をした (I4)、授業外の学習 (I6) は、それぞれ 3 点台、0.88 時間とやや低いため、授業以外の時間にも自主的に学習でき

るような仕組みづくりが必要と考えられる。

授業の進め方(Ⅱ)では、(Ⅱ1)から(Ⅱ9)までの項目が全て4点台を獲得しており、全般に他の多彩な学びのカテゴリと比較すると高い。特に(Ⅱ9)の得点が4.52とあるように、提示するやり方や授業の進め方の工夫が優れており、内容の興味深さを十分に伝えきれていると考えられる。

この授業から得ることができたもの(Ⅲ)では、新しい考え方・発想(Ⅲ1)や基本的な専門知識(Ⅲ2)が4以上であるのに対して、自分で調べ、考える姿勢(Ⅲ3)が昨年度よりは上回っているものの、3.74とやや低く、授業外に学習した時間(Ⅰ6)の短さと通じている。繰り返しになるが、授業以外の時間にも自主的に学習できるような仕組みづくりが必要と考えられる。

評価に対する科目担当者の所見からは、各教員が学生の意見に真摯に向き合い、改善への工夫を重ねていることが明らかになった。授業内アンケートの実施やリアクションペーパーのフィードバックの工夫が効果的であったとのコメントが多くあったので、今後も継続してこれらの手法を有効活用していけると良いと思う。そして、今年度も大人数授業での私語問題などの所見が僅かであった。SAの配置が効果的で静粛性につながったことも述べられていた。一方、途中退出が気になり、大学としての注意喚起が必要であるとの意見もあったので、座席指定制にするなど、引き続き、できる限り皆が納得し、落ち着いて受講できる教室規模や履修者数の適正化など、授業環境に関して改善を検討することが望まれる。

## 5) 自然への理解 (FE)

「自然への理解」では37科目でアンケートが実施された。多くの項目で全学共通科目の平均値と同等あるいはそれを上回っている。総合的な評価(Ⅳ)の項目では、いずれも評価が高く受講者の満足度は高いように思われる。

授業への取り組み方(Ⅰ)の項目については、授業の出席率(Ⅰ1)が全学共通科目の全カテゴリの中で最も低く91.01%であった。積極的に参加した(Ⅰ2)も全学共通科目の平均値4.11より低く4.03であり、授業への出席状況は「多彩な学び」の中では低い方であった。授業の履修に対して十分な準備ができていた(Ⅰ3)と発展的な勉強をした(Ⅰ4)については3.5以下であり、授業外に学習した時間(Ⅰ6)が1を切っていることから、学生の自発的な学習につながらなかったと考えられる。科目担当者のコメントでは、理系ではない学生への情報伝達の方法等について苦慮している様子がうかがえる。また、学習に対する学生の意欲や態度の個人差を指摘するコメントも見受けられる。

授業の進め方(Ⅱ)については、比較的高い評価を得ている。特に映像視覚教材の使用(Ⅱ8)については4.38と評価が高い。「映像資料の利用が効果的である」等のコメントもあり、図や動画の活用が有効であることが分かる。その一方で、「説明がくどくて飽きた」というコメントもあった。また、板書の仕方(Ⅱ7)の評価だけが4を下回っているが、「板書や説明のスピードが速すぎる」との指摘があったこと等も関連するように思われる。「授業内容の難易度が高過ぎる」や「情報量が多過ぎる」とのコメントも見受けられる。

この授業から得ることができたもの(Ⅲ)では、新しい考え方・発想(Ⅲ1)や基本的な専門知識(Ⅲ2)が4以上であるのに対して、自分で調べ、考える姿勢(Ⅲ3)が3.77と低

い。全学共通科目全体の平均でも 3.73 と低く、授業外に学習した時間（I6）の短さと通じている。学生の自ら学ぶ姿勢の不足を指摘する教員からのコメントも見られる。

「自然への理解」の総合的な評価（IV）も比較的高く、受講者の満足度は高いものと推察される。自然科学への興味をかきたてられた（IV3）の評価は中程度であるが、このカテゴリ設置の目的は十分に達せられているものと考えられる。授業目的の明確さ（IV2）とわかりやすさ（IV1）の評価が高く、これが満足度の高さ（IV4）につながっているようである。同じ授業でも「説明やレジュメが解り易い」と「内容が専門的で難しい」との両方のコメントがある場合がある。

設備（V）については、教室の規模や設備に関する評価はアンケート結果では高いが、コメント欄には「PCの位置が不適切であった」や「大規模教室の授業環境の保全が困難である」等の意見もあった。

#### 6) 知識の現場 (FV)

全学共通科目の平均値に比べて、各項目の評価は昨年度同様に非常に高い。ほとんどの授業が定員を設けた少人数科目で、勉学意欲の高い学生が集まっていることを割り引いても、授業以外での学習時間は 2.27 時間、授業満足度（IV4）は 4.56、さらに「自分で調べ、考える姿勢（III3）」についても 4.52 と極めて良好な結果となっている。

特に GL101 は、授業以外の学習時間が群を抜いて高いことから、学生負担の大きい科目であることが読み取れる。その一方で、そういった学生たちの努力に対して、科目担当者がしっかり応答していることが所見票から伝わってくる。学生と教員が双方向で積極的にかかわり、良好に運営されていることから、満足度も大変高いことが総合評価から読み取れる。単位数の上乗せを望む声上がるのも、当然の成り行きかもしれない。

一方、英語で実施されている授業では魅力的な授業内容や教員の熱意にもかかわらず、受講者数が少ないことは、残念なことである。シラバスや広報活動などを通して学生に伝わるような工夫が望まれる。また、履修学生数と回答者数のひらきは、脱落者の存在を示唆しているのかもしれない。少人数科目であるので、双方の理解と歩み寄りによって改善できる部分は少なくないのではないだろうか。

#### 4. 今後の改善に向けて

集計データからみられる全学共通科目の評価は、昨年度同様に今年度も全般的に上昇している。これは全学共通科目に携わる、すべての教職員による努力の成果であるといえる。しかしながら、今年度の集計データの分析結果からは、今後さらに改善すべき課題も明らかにされている。

まずは、昨年度同様に今年度も「回答者数」および「回答率」の向上が課題として位置づけられる。つづいて、「板書のしかた」といったテクニカルな点についても、引き続き改善の余地が残されている。また、「授業時以外に学習した時間」や「自分で調べ、考える姿勢」に関する平均値の数値そのものの低さからも明らかのように、学生による能動的かつ発展的な学習スタイルの確立に向けた取り組み強化についても、昨年度同様に今年度も継続的な課題として位置づけられよう。その意味では、「知識の現場（FV）」の GL101 に代表されるアクティブ・ラーニングにおけるさまざまな蓄積を、そのほかのカテゴリへと共

有させる仕組みづくりも検討すべき段階に来ている。最後に、大学側の取り組みとして、今年度以降も引き続き、教室問題解消への地道な努力が挙げられる。

このように昨年度同様に今年度も、改善すべき課題は多岐にわたっているが、大学全体が一丸となって課題解決に向けた取り組みを続けていく必要がある。

## 4-13 学校・社会教育講座

### 1. 科目選定方針とねらい

今年度は「1 教員 1 科目」の年であったが、学校・社会教育講座（以下、講座）においては、教職課程では原則として講義科目を対象とし 1 教員 1 科目、他の課程では重点的科目に焦点を当て全科目にわたって数年で実施できるよう、各々の課程で工夫を凝らしてアンケートを実施した。この理由としては、持続的な評価を実施することにより、各々の授業を振り返ることができ、さらなる授業の充実や改善につながる点が挙げられる。なお、原則として履修者が 5 名以下の授業に関しては、実施を見合わせることにしているが、最終的には各課程や授業担当者の意向を尊重し、判断されている。

### 2. 集計データにみられる結果のまとめ

講座の調査対象科目は、合計 60 科目（春学期 40 科目、秋学期 20 科目）であり、履修者数は 2,200 名、延べ回答者数は 1,749 名、回答率は 79.50% であり、今回の調査対象となったすべての学部の中で、最も高い回答率となっていた。また、回答者の学年は、1 年生が 713 名、2 年生が 576 名、3 年生が 352 名、4 年生が 57 名、その他が 51 名となっており、下の学年ほど履修者が多い講座の現状が見受けられた。この背景としては、1、2 年生には講義科目が中心に、3、4 年生には演習や実習が中心に配当されている履修のスタイルの反映がうかがえる。

I 「この授業へのあなたの取り組み方について…」では、「授業全体を通じての出席率」が 94.70% であり、アンケート実施対象学部等のうち最も高い数値を示していた。また、「この授業に積極的に参加した」においても、4.30 は最も高いものとなっていた。このことから、教職をはじめとする各々の履修者が目的とする免許状や資格取得に向け、高いモチベーションを抱きつつ、授業に取り組んでいた様子が推察される。しかし、「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」に関しては、全学が 1.04 であったのに対し、講座では 0.89 という結果であった。詳細に目を向けると、3 時間以上が約 5%、2~3 時間が約 8%、1~2 時間が約 22%、1 時間未満が約 37% というのが、授業時以外での学びの時間となっていた。この点に関しては、履修者の負担が過剰にならないように配慮しつつも、適切な課題の設定や、関連する学びの紹介などを検討する必要があるといえよう。

II 「この授業の進め方は…」では、「聞きやすい話し方だった」、「各回の授業内容の量が適切だった」、「各回の授業のねらいは明確だった」、「各回の授業内容は明確だった」、「十分な静粛性が保たれた」、「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」の項目において、4.35 以上の高い数値が示され、全学の中でも最も高い結果であった。各授業担当教員の大いなる努力や工夫の蓄積ととらえることができる。また、このカテゴリでは、すべての項目が 4.00 を上回っていたが、より質の高い授業を目指し、さらなる発展が期待される。

III 「この授業から得ることができたもの」では、「自分にとって新しい考え方・発想」、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」、「自分で調べ、考える姿勢」、「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」のすべての項目において、3.90~4.31 と、全学平均を上回る結果が示された。しかし、「自分で調べ、考える姿勢」の項目に着目すると、講座においても、全学においても相対的に低い様子が見受けられる。講義科目においても、

アクティブ・ラーニングの観点から、より学生が主体的に学ぼうとするモチベーションにはたらきかけていく工夫が強く求められる部分だといえよう。

IV「総合的にみて、この授業は…」では、すべての項目で4.00を超える結果が見られたが、特に「わかりやすい授業だった」における4.43は特筆すべきものだといえよう。各担当教員が常に授業における改善や工夫を継続している様子が見える点である。

また、「授業規模別平均値」に関しては、講座内では101名以上の授業が1科目であったこと、151名以上の授業がなかったことから、50名以下の授業と、51～100名の授業を対象とすることになった。各項目において、両者の平均値を比較したところ、最大の数値の差は「シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」の0.26であったものの、履修者数による大幅な数値の差は見受けられなかったと判断できる。このことから、履修者数に関わらず、履修者の授業に対する高く主体的なモチベーション、担当教員の授業に対する真摯な創意工夫は、保たれていたものと考えられる。

なお、「学年別平均値」においては、「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」、「聞きやすい話し方だった」、「十分な静粛性が保たれた」、「教員は授業の準備を周到に行っていた」、「わかりやすい授業だった」の項目について、学年が上がるにつれ、平均値が上昇している様子が把握された。これらに関しては、履修者が授業の内容に加え、指導者等としての立場についても視点を広げていった可能性が見える。また、授業時以外の学習時間が学年に伴って増加していた点に関しては、履修者自身が学年を重ねるごとに、興味関心の幅を広げ、自ら学ぼうとする姿勢を習得していった面が読みとれるといえよう。

また、II「この授業の進め方は…」のカテゴリ内9項目およびIV「総合的にみて、この授業は…」のカテゴリ内4項目に関しては、1年生から4年生までのすべての平均値は4.00を上回っていた。このことから、各担当教員の分かりやすい授業への工夫や準備の結果が、履修者の満足度につながっていることが推察される。

### 3. 担当教員の所見票に対するまとめ

#### 3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員は履修者の授業に対する高い評価を肯定的にとらえているとともに、「履修者の授業への真摯な姿勢、協力によるもの」としてのコメントを発している。同時に、グループワークなどが積極的に多く取り入れられている様子が見え、この点に関しても履修者は積極的かつ意欲的に取り組んでいる背景を読み取ることができた。教員と履修者との双方向コミュニケーションが構築されつつ、有意義な授業が行われていると判断できる。

#### 3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

##### 1) 所見票に現れた学生の意見（記述による評価）の集約

肯定的意見が多かった記述として、「グループワークやロールプレイングなどが多く取り入れられていた」、「ビデオなどの視聴覚教材が活用されていた」、「リアクションペーパーなどのフィードバックが効果的であった」などが見られた。各教員の授業に対する丁寧かつ真摯な姿勢をうかがうことができる。否定的意見はほとんど見られなかったが、「パワーポイントの進行が速すぎる」、「講義資料の準備について」などが挙げられていた。

## 2) 上記 1) に対する担当教員の所見のまとめ

肯定的意見の多かった記述としては、各担当教員から、今後も授業をより有意義なものにさせる努力とともに、継続のコメントが寄せられていた。一方、否定的意見の見られた数件の記述に関しても、担当教員による履修者の学ぶ環境への協力・尽力を確認することができた。プレゼンテーションソフトの使用に関しては、「履修者がスライドを見る時間を確保する」、「スライドの情報を記入できる時間を確保する」、「スライドの文字数の改善をする」など、講義資料の準備に関しては、「Web のみならず、口頭でも期日等を明確に伝える」、「読みやすさや提示する文章の量を改めて整理する」などの、今後の改善に対するコメントが見られた。

### 3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

全体的に、担当教員の肯定的意見は今後も継続していく点、否定的意見に関してもリジェクトするのではなく受容しながら、自身の今後の授業の質の向上につなげていこうとする点が多く読み取ることができた。今後も、履修者の興味関心に触れ、疑問や要望を丁寧にとらえつつ、より質の高い授業が展開されることが期待できる。

## 4. 今後の改善に向けて

講座においては、一部を除き概ね 4.00 以上の高い平均値が示されていたため、履修者の授業に対する満足度もある一定の水準を満たすものであると判断できる。また、担当教員についても、この結果に満足することなく、授業の改善や質の向上へ持続して取り組んでいこうとする様子が確認できた。ただ、若干「授業時以外に学習した時間」の項目について、今後見直していくことが必要になると思われる。「わかりやすい授業」であることに加え、履修者自身がさらなる学びを進めるべく、そのモチベーションに深く触れられるようにする授業について、各々の教員が模索し、検討していくことが求められる。

## 5. 2019 年度のまとめと今後の展望

大学教育開発・支援センター

TL (Teaching & Learning) 部会長 幡野 弘樹

### 1. はじめに

2020 年度より授業評価アンケートの実施体制の変更に伴い、大学教育開発・支援センター TL 部会長が本欄を執筆することとなった。まずは、アンケートに参加した学生の皆さん、貴重な授業時間を割いてアンケートの時間をもうけ、さらには所見票への記述もして下さった教員の方々をはじめとして、本学の授業評価アンケートに携わったすべての方々にお礼を申し上げたい。大学教育開発・支援センターでは、より良い授業を行うことができるよう、データを分析するとともに授業を改善するためのさまざまな手法の提案を行っているが、毎年の授業評価アンケートは、まさに上記の活動を行うにあたって最も貴重な基礎資料となっている。今後も、アンケートへの積極的なご協力をお願いしたい。

2019 年度のまとめおよび今後の展望として、必ずしも網羅的ではないが、以下の 2～4 で述べる 3 点を指摘したい。

### 2. 100 分授業導入の影響

まず、2019 年度は授業時間が 100 分となった最初の年度であったが、各学部等の総評において、この点に言及するものはそれほど多くは見られなかった。これは、文学部の総評にある通り、大きな混乱はなかったということの現れであろう。「100 分間聴いていて飽きなかった」という意見が寄せられていたことも紹介されている（経済学部の総評）。大きな混乱がなかったことの背後には、教員の周到な準備があったことが推測される。

### 3. 学生からの評価の高い授業手法

学生からの評価の高い授業の手法には全体に共通する傾向がある。それらは、いくつかの 카테고リーに分けることができる。ここでは 3 つのカテゴリーに分けて紹介したい。

第一に、教員と学生間のコミュニケーションの機会の確保や学生間のグループワークなど、一方的な情報伝達ではない形でのコミュニケーションの場を作り出すことが望まれる傾向にある。教員の伝えたいことが学生に伝わっていないということは、しばしばある。学生・教員間のコミュニケーションは、このような状況を減らすことにつながる。学生間のコミュニケーションは、知識の確認だけでなく、知識の相対化も可能にする。いずれも有用な授業手法であるように思われる。

第二に、映像資料やゲストスピーカーの採用についても、学生から好意的な意見が寄せられている。視覚的なイメージは、言語だけでは伝えきれないものを伝達する力がある。ゲストスピーカーによる授業は、教員とは異なる視点（多くの場合、現場・実務の視点であろう）から学生の理解を助ける。そのような 1 つのテーマを多角的に理解できるような機会が望まれているといえることができる。

第三に、例題や小テストなどによる定期的な知識の確認も求められている傾向にある。これらの課題が前回の授業と今回の授業がどのようにつながっているかの理解を助けること

も多いであろう。それだけでなく、抽象的な知識を、学生がうまく具体的な場面に即して応用できるようにするという意義がある場合もあろう。多くの学部で、学生の自宅学習の時間の少なさについて課題として挙げていた。例題や小テストは、課題への対応としても有用な方策であるといえる。もっとも、予復習などの課題の増加により授業に積極的な学生と消極的な学生の二極化が生ずるという指摘もある（コミュニティ福祉学部の総評）ところであり、量的にも質的にも適切な課題を設定することにも留意する必要がある。

#### 4. グローバル化に向けて

留学生の増加に伴い、今後は日本語が母国語ではない留学生への対応が重要な課題になるものと思われる。既にそのような課題に着手している学部もある（異文化コミュニケーション学部の総評ではこの点を明確に意識している）。将来的には、この授業評価アンケートの総評部分でこのような課題を解決するためのきっかけを提供できるようになればと考えている。

#### 5. おわりに

2020年度春学期は、新型コロナウイルス感染症への対応のため、従来通りの授業評価アンケートは行えなかった（その代わりに、オンライン授業における学修状況調査が行われた）。依然今後の状況が見通せない状況が続いているが、与えられた状況の中で最善の教育ができるよう、大学教育開発・支援センターも時宜に合った形での調査や情報提供を行ってきたい。

## 6. 2019 年度集計データ（資料編）

### 6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 110,207 名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文学部	23,262	15,995	68.76
経済学部	22,061	12,023	54.50
理学部	7,093	4,357	61.43
社会学部	17,267	9,379	54.32
法学部	15,580	6,481	41.60
経営学部	14,665	7,673	52.32
異文化コミュニケーション学部	3,428	2,508	73.16
グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター	347	269	77.52
観光学部	13,105	9,171	69.98
コミュニティ福祉学部	11,335	7,864	69.38
現代心理学部	7,620	5,457	71.61
全学共通カリキュラム運営センター	41,618	27,281	65.55
学校・社会教育講座	2,200	1,749	79.50
合計	179,581	110,207	61.37

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	その他	合計
文学部	2,999	5,538	5,329	1,846	283	15,995
経済学部	4,934	3,137	2,473	1,192	287	12,023
理学部	1,468	1,561	1,050	206	72	4,357
社会学部	3,085	2,818	2,187	1,032	257	9,379
法学部	1,878	1,868	1,752	847	136	6,481
経営学部	2,151	1,998	2,136	966	422	7,673
異文化コミュニケーション学部	600	506	934	293	175	2,508
グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター	83	69	66	19	32	269
観光学部	2,323	2,868	3,091	744	145	9,171
コミュニティ福祉学部	2,181	2,510	2,412	634	127	7,864
現代心理学部	1,066	2,255	1,606	465	65	5,457
全学共通カリキュラム運営センター	10,843	7,662	5,596	2,369	811	27,281
学校・社会教育講座	713	576	352	57	51	1,749
合計	34,324	33,366	28,984	10,670	2,863	110,207

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は、当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 「その他」は、本学学部生以外（本学大学院学生・特別外国人学生・特別聴講学生・科目等履修生等）と学年にマークがなかった不明者

注4) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

## 6-2 全学集計

表3 全学平均値

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sub>*1</sub>	109,884	91.94	13.79
I 2 この授業に積極的に参加した	109,887	4.10	0.91
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	109,846	3.60	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	109,726	3.47	1.12
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	109,400	3.84	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sub>*2</sub>	109,625	1.04	1.06
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	109,837	4.17	0.97
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	109,829	4.17	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	109,799	4.18	0.91
II 4 各回の授業内容は明確だった	109,716	4.21	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	109,679	4.19	0.95
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	108,852	4.11	0.97
II 7 板書のしかたが適切だった	61,884	3.91	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	95,764	4.27	0.90
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	107,696	4.38	0.80
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	109,712	4.10	0.92
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	109,702	4.09	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	109,669	3.78	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	109,566	4.02	0.94
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	109,651	4.14	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	109,636	4.16	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	109,632	4.03	1.00
IV 4 この授業を受けて満足した	109,616	4.11	0.97

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表4 設問項目別平均値（学部等間比較）

全学および学部等別延べ回答者数およびアンケート実施科目数

学部等	全学	文	経済	理	社会	法	経営	異文化	GLAP	観光	法	経営	異文化	GLAP	観光	現心	全学共通	講座
回答者数	110,207	15,995	12,023	4,357	9,379	6,481	7,673	2,508	269	9,171	96	7,864	5,457	27,281	1,749			
科目数	1,756	299	223	101	123	73	103	98	19	96	123	123	78	360	60			

注1) 下表の平均値は、科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出

学部間等比較

設問項目	全学	文	経済	理	社会	法	経営	異文化	GLAP	観光	法	経営	異文化	GLAP	観光	コミ福	現心	全学共通	講座
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>																			
I1 授業全体を通じての出席率*1	91.94	92.55	90.51	93.33	92.32	84.71	92.55	93.68	94.48	92.95	92.15	92.55	93.68	94.48	92.95	92.15	93.11	92.39	94.70
I2 この授業に積極的に参加した	4.10	4.13	4.11	4.19	4.02	3.77	4.10	4.22	4.16	4.14	4.08	4.10	4.22	4.16	4.14	4.08	4.17	4.11	4.30
I3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.60	3.64	3.69	3.69	3.49	3.24	3.74	3.87	3.91	3.61	3.61	3.74	3.87	3.91	3.61	3.61	3.59	3.55	3.73
I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.47	3.55	3.55	3.61	3.35	3.17	3.63	3.84	3.95	3.45	3.43	3.63	3.84	3.95	3.45	3.43	3.41	3.41	3.60
I5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3.84	3.95	3.74	3.73	3.75	3.59	3.78	4.06	3.86	3.94	3.85	3.78	4.06	3.86	3.94	3.85	3.95	3.86	3.84
I6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	1.04	1.06	1.29	1.40	0.94	1.12	1.26	1.31	1.40	0.91	0.89	1.26	1.31	1.40	0.91	0.89	0.80	0.92	0.89
<b>II この授業の進め方は…</b>																			
II1 聞きやすい話し方だった	4.17	4.24	4.08	4.05	4.09	4.01	4.09	4.35	4.11	4.19	4.16	4.09	4.35	4.11	4.19	4.16	4.29	4.21	4.48
II2 各回の授業内容の量が適切だった	4.17	4.24	4.07	4.06	4.13	4.02	4.12	4.33	4.17	4.18	4.13	4.12	4.33	4.17	4.18	4.13	4.26	4.21	4.35
II3 各回の授業のねらいは明確だった	4.18	4.23	4.09	4.09	4.12	4.06	4.12	4.34	4.09	4.21	4.17	4.12	4.34	4.09	4.21	4.17	4.27	4.20	4.36
II4 各回の授業内容は明確だった	4.21	4.27	4.11	4.11	4.15	4.11	4.12	4.38	4.09	4.24	4.20	4.12	4.38	4.09	4.24	4.20	4.32	4.23	4.41
II5 十分な静粛性が保たれた	4.19	4.24	4.01	4.18	4.03	4.23	4.10	4.25	4.32	4.26	4.21	4.10	4.25	4.32	4.26	4.21	4.34	4.21	4.55
II6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4.11	4.22	4.03	4.08	4.03	3.97	4.01	4.26	4.05	4.17	4.11	4.01	4.26	4.05	4.17	4.11	4.17	4.12	4.36
II7 板書のしかたが適切だった	3.91	3.98	3.89	3.96	3.82	3.63	3.87	4.20	4.19	3.93	3.88	3.87	4.20	4.19	3.93	3.88	3.99	3.94	4.16
II8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4.27	4.33	4.06	4.11	4.23	4.07	4.13	4.46	4.48	4.33	4.29	4.13	4.46	4.48	4.33	4.29	4.43	4.35	4.44
II9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.38	4.45	4.22	4.27	4.34	4.28	4.29	4.55	4.56	4.46	4.38	4.29	4.55	4.56	4.46	4.38	4.48	4.43	4.56
<b>III この授業から得ることができたもの</b>																			
III1 自分にとって新しい考え方・発想	4.10	4.17	3.89	4.01	4.07	3.86	4.05	4.33	4.23	4.15	4.10	4.05	4.33	4.23	4.15	4.10	4.20	4.17	4.31
III2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4.09	4.14	4.00	4.07	4.03	3.95	4.10	4.28	4.13	4.15	4.09	4.10	4.28	4.13	4.15	4.09	4.22	4.06	4.28
III3 自分で調べ、考える姿勢	3.78	3.85	3.79	3.91	3.68	3.63	3.88	4.04	4.00	3.80	3.74	3.88	4.04	4.00	3.80	3.74	3.73	3.73	3.90
III4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4.02	4.04	3.89	3.83	4.04	3.89	4.04	4.24	4.15	4.07	4.04	4.04	4.24	4.15	4.07	4.04	4.07	4.04	4.26
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>																			
IV1 わかりやすい授業だった	4.14	4.21	4.04	3.96	4.10	4.01	4.05	4.30	3.94	4.17	4.13	4.05	4.30	3.94	4.17	4.13	4.25	4.17	4.43
IV2 授業全体の目標が明確だった	4.16	4.22	4.07	4.06	4.10	4.05	4.11	4.35	4.08	4.19	4.16	4.11	4.35	4.08	4.19	4.16	4.27	4.19	4.36
IV3 学問的興味をかきたてられた	4.03	4.12	3.90	3.93	3.97	3.88	3.98	4.24	4.06	4.05	3.99	3.98	4.24	4.06	4.05	3.99	4.13	4.07	4.16
IV4 この授業を受けて満足した	4.11	4.19	3.99	3.97	4.06	3.97	4.05	4.30	4.03	4.14	4.09	4.05	4.30	4.03	4.14	4.09	4.25	4.15	4.30

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表5 学年別平均値

学年別延べ回答者数

学年	1年	2年	3年	4年	合計
回答者数	34,324	33,366	28,984	10,670	107,344

注1) 学年は、当該学部で実施したアンケートに回答した学生の学年

学年別平均値 (全学)

設 問 項 目	1年	2年	3年	4年
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>				
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	94.31	92.36	91.02	85.44
I 2 この授業に積極的に参加した	4.16	4.10	4.05	3.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.57	3.62	3.61	3.55
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.41	3.48	3.49	3.52
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3.67	3.88	3.95	3.95
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	1.03	1.02	1.02	1.09
<b>II この授業の進め方は…</b>				
II 1 聞きやすい話し方だった	4.10	4.18	4.21	4.27
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4.10	4.17	4.22	4.25
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4.11	4.18	4.22	4.26
II 4 各回の授業内容は明確だった	4.13	4.21	4.25	4.30
II 5 十分な静粛性が保たれた	4.07	4.24	4.25	4.25
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4.07	4.12	4.14	4.15
II 7 板書のしかたが適切だった	3.85	3.92	3.95	3.97
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4.21	4.28	4.31	4.34
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.35	4.38	4.41	4.44
<b>III この授業から得ることができたもの</b>				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4.05	4.10	4.14	4.17
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4.04	4.09	4.13	4.12
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.73	3.78	3.81	3.84
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3.94	4.01	4.07	4.13
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>				
IV 1 わかりやすい授業だった	4.06	4.14	4.18	4.24
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4.09	4.16	4.21	4.26
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3.94	4.03	4.08	4.15
IV 4 この授業を受けて満足した	4.03	4.12	4.16	4.23

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表6 授業規模別平均値

授業規模別延べ回答者数およびアンケート実施科目数

授業規模	50名以下	51～100名	101～150名	151名以上	合計
回答者数	22,179	32,101	22,903	33,024	110,207
科目数	956	444	186	170	1,756

注1) 授業規模は履修者数ではなく、実際の出席者数に近いと思われる回答者数を使用

下表の平均値は、授業規模別の科目数ではなく、該当科目の延べ回答者数により算出

授業規模別平均値（全学）

設 問 項 目	50名以下	51～100名	101～150名	151名以上
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>				
I 1 授業全体を通じての出席率*1	92.13	91.57	91.46	92.49
I 2 この授業に積極的に参加した	4.19	4.07	4.06	4.08
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3.72	3.58	3.56	3.56
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3.66	3.46	3.40	3.40
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	3.90	3.82	3.82	3.82
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	1.20	1.03	0.99	0.97
<b>II この授業の進め方は…</b>				
II 1 聞きやすい話し方だった	4.30	4.12	4.14	4.15
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4.25	4.13	4.16	4.16
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4.28	4.15	4.16	4.15
II 4 各回の授業内容は明確だった	4.31	4.18	4.18	4.18
II 5 十分な静肅性が保たれた	4.49	4.24	4.11	3.99
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4.23	4.09	4.09	4.07
II 7 板書のしかたが適切だった	4.07	3.87	3.90	3.83
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4.37	4.24	4.27	4.24
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4.48	4.36	4.37	4.35
<b>III この授業から得ることができたもの</b>				
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4.21	4.08	4.05	4.08
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4.20	4.08	4.04	4.04
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3.97	3.76	3.70	3.72
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4.12	4.00	3.98	3.99
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>				
IV 1 わかりやすい授業だった	4.22	4.09	4.12	4.14
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4.27	4.14	4.13	4.13
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4.15	4.00	3.99	4.01
IV 4 この授業を受けて満足した	4.23	4.08	4.08	4.09

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

## 6-3 学部等別平均値

表7 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率 <sub>*1</sub>	15,962	92.55	12.25
I 2 この授業に積極的に参加した	15,960	4.13	0.87
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	15,964	3.64	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	15,939	3.55	1.08
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	15,915	3.95	0.95
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 <sub>*2</sub>	15,929	1.06	1.04
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	15,957	4.24	0.92
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	15,959	4.24	0.87
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	15,950	4.23	0.87
II 4 各回の授業内容は明確だった	15,954	4.27	0.86
II 5 十分な静粛性が保たれた	15,943	4.24	0.93
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	15,804	4.22	0.90
II 7 板書のしかたが適切だった	8,756	3.98	1.02
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	13,098	4.33	0.85
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	15,612	4.45	0.75
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	15,945	4.17	0.88
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	15,948	4.14	0.86
III 3 自分で調べ、考える姿勢	15,938	3.85	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	15,940	4.04	0.93
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	15,939	4.21	0.92
IV 2 授業全体の目標が明確だった	15,939	4.22	0.87
IV 3 学問的興味をかきたてられた	15,938	4.12	0.95
IV 4 この授業を受けて満足した	15,932	4.19	0.92
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	15,343	4.34	0.93
V 2 この授業の受講者数は適切だった	15,334	4.33	0.90

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) II 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表8 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率*1	11,971	90.51	16.29
I 2 この授業に積極的に参加した	11,971	4.11	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	11,968	3.69	1.08
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	11,963	3.55	1.15
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	11,924	3.74	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間*2	11,947	1.29	1.13
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	11,967	4.08	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	11,962	4.07	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	11,958	4.09	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	11,953	4.11	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	11,938	4.01	1.08
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	11,889	4.03	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	8,846	3.89	1.08
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	9,804	4.06	1.01
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	11,710	4.22	0.90
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	11,942	3.89	0.99
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	11,938	4.00	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	11,928	3.79	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	11,918	3.89	0.99
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	11,927	4.04	1.04
IV 2 授業全体の目標が明確だった	11,930	4.07	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	11,931	3.90	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	11,931	3.99	1.03
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 （基礎ゼミナール1）経済文献を読む力がついた	571	4.13	0.96
V 2 （基礎ゼミナール1）レジュメやレポート作成の力がついた	569	4.30	0.89
V 3 （情報処理入門1）表計算ソフト（Excel）の応用力が身についた	538	4.27	0.85
V 4 （情報処理入門1）Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	540	4.24	0.87
V 5 （情報処理入門1）WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	541	4.19	0.88

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表9 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	4,346	93.33	13.52
I 2 この授業に積極的に参加した	4,344	4.19	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,344	3.69	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,339	3.61	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,321	3.73	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	4,325	1.40	1.05
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,335	4.05	1.03
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,336	4.06	0.98
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,334	4.09	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,329	4.11	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,331	4.18	0.93
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,312	4.08	0.99
II 7 板書のしかたが適切だった	3,575	3.96	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	3,301	4.11	0.98
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,272	4.27	0.87
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,334	4.01	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,330	4.07	0.89
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,331	3.91	0.96
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,323	3.83	0.98
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,327	3.96	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,327	4.06	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,326	3.93	1.01
IV 4 この授業を受けて満足した	4,321	3.97	1.01
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 シラバスに沿って授業が行われた	4,245	4.18	0.84
V 2 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,242	4.15	0.89
V 3 (1年次春学期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた	747	3.75	1.03
V 4 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった	2,574	4.01	1.01

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表10 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	9,356	92.32	13.16
I 2 この授業に積極的に参加した	9,350	4.02	0.90
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,344	3.49	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,338	3.35	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,314	3.75	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	9,326	0.94	1.02
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,345	4.09	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,344	4.13	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,342	4.12	0.90
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,330	4.15	0.89
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,323	4.03	1.06
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,252	4.03	0.98
II 7 板書のしかたが適切だった	4,805	3.82	1.03
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,173	4.23	0.90
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,159	4.34	0.80
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,329	4.07	0.90
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,331	4.03	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,333	3.68	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,322	4.04	0.91
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,329	4.10	0.95
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,328	4.10	0.90
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,326	3.97	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	9,326	4.06	0.96

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 1 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	6,460	84.71	20.92
I 2 この授業に積極的に参加した	6,462	3.77	1.10
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,454	3.24	1.10
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,450	3.17	1.16
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,428	3.59	1.06
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	6,444	1.12	1.01
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,455	4.01	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,454	4.02	1.00
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,456	4.06	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,443	4.11	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,443	4.23	0.90
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,407	3.97	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	4,409	3.63	1.16
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	4,454	4.07	1.00
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,298	4.28	0.85
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,445	3.86	0.99
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,447	3.95	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,448	3.63	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,440	3.89	0.98
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,445	4.01	1.05
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,444	4.05	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,445	3.88	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	6,444	3.97	1.02

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 2 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	7,638	92.55	13.11
I 2 この授業に積極的に参加した	7,641	4.10	0.90
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,635	3.74	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,629	3.63	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,599	3.78	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	7,613	1.26	1.12
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,632	4.09	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,634	4.12	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,635	4.12	0.94
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,623	4.12	0.94
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,618	4.10	0.97
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,560	4.01	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	4,316	3.87	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,116	4.13	0.98
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,508	4.29	0.86
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,618	4.05	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,623	4.10	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,618	3.88	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,604	4.04	0.93
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,617	4.05	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,612	4.11	0.94
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,617	3.98	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	7,613	4.05	1.00

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表13 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	2,492	93.68	10.77
I 2 この授業に積極的に参加した	2,498	4.22	0.85
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,496	3.87	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,490	3.84	1.07
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,476	4.06	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	2,477	1.31	1.08
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,496	4.35	0.88
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,496	4.33	0.87
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,495	4.34	0.85
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,493	4.38	0.83
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,494	4.25	0.93
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,473	4.26	0.93
II 7 板書のしかたが適切だった	1,383	4.20	0.94
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	2,351	4.46	0.81
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,444	4.55	0.72
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,496	4.33	0.85
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,496	4.28	0.85
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,495	4.04	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,491	4.24	0.89
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,495	4.30	0.92
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,492	4.35	0.86
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,494	4.24	0.95
IV 4 この授業を受けて満足した	2,495	4.30	0.92

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 4 グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	268	94.48	10.21
I 2 この授業に積極的に参加した	269	4.16	0.85
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	268	3.91	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	267	3.95	1.14
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	268	3.86	1.09
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	268	1.40	0.92
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	268	4.11	1.10
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	269	4.17	1.01
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	269	4.09	1.12
II 4 各回の授業内容は明確だった	268	4.09	1.07
II 5 十分な静粛性が保たれた	269	4.32	0.85
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	266	4.05	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	203	4.19	1.11
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	262	4.48	0.90
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	263	4.56	0.84
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	269	4.23	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	269	4.13	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	269	4.00	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	268	4.15	1.03
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	269	3.94	1.14
IV 2 授業全体の目標が明確だった	269	4.08	1.10
IV 3 学問的興味をかきたてられた	268	4.06	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	268	4.03	1.14

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表 1 5 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	9,146	92.95	12.03
I 2 この授業に積極的に参加した	9,151	4.14	0.86
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,150	3.61	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,140	3.45	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,111	3.94	0.94
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	9,137	0.91	1.00
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,150	4.19	0.93
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,148	4.18	0.90
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,147	4.21	0.89
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,132	4.24	0.88
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,141	4.26	0.88
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,065	4.17	0.93
II 7 板書のしかたが適切だった	3,811	3.93	1.01
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,633	4.33	0.83
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	8,987	4.46	0.74
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,140	4.15	0.89
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,140	4.15	0.86
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,137	3.80	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,132	4.07	0.91
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,133	4.17	0.93
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,132	4.19	0.90
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,129	4.05	0.98
IV 4 この授業を受けて満足した	9,134	4.14	0.94

注 1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表16 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	7,855	92.15	12.72
I 2 この授業に積極的に参加した	7,856	4.08	0.89
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,853	3.61	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,845	3.43	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	7,825	3.85	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	7,843	0.89	1.01
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,851	4.16	0.96
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,852	4.13	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,849	4.17	0.91
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,846	4.20	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,844	4.21	0.91
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,775	4.11	0.96
II 7 板書のしかたが適切だった	3,836	3.88	1.05
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	7,223	4.29	0.89
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,705	4.38	0.80
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,846	4.10	0.90
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,848	4.09	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,844	3.74	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,840	4.04	0.93
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,839	4.13	0.96
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,841	4.16	0.92
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,839	3.99	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	7,839	4.09	0.97

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表17 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	5,450	93.11	11.48
I 2 この授業に積極的に参加した	5,449	4.17	0.84
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	5,449	3.59	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	5,437	3.41	1.11
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	5,418	3.95	0.97
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	5,443	0.80	0.92
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	5,450	4.29	0.90
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	5,451	4.26	0.88
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	5,447	4.27	0.89
II 4 各回の授業内容は明確だった	5,443	4.32	0.86
II 5 十分な静粛性が保たれた	5,444	4.34	0.87
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	5,393	4.17	1.01
II 7 板書のしかたが適切だった	2,174	3.99	1.04
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	5,039	4.43	0.82
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	5,359	4.48	0.74
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	5,444	4.20	0.87
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	5,439	4.22	0.84
III 3 自分で調べ、考える姿勢	5,439	3.73	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	5,433	4.07	0.92
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	5,443	4.25	0.92
IV 2 授業全体の目標が明確だった	5,444	4.27	0.88
IV 3 学問的興味をかきたてられた	5,441	4.13	0.97
IV 4 この授業を受けて満足した	5,443	4.25	0.91
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	5,281	4.44	0.78
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	5,275	4.43	0.80
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	5,256	4.28	0.87

注1) 回答者数は延べ人数（II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) II 1は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表18 全学共通カリキュラム運営センター

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	27,192	92.39	12.91
I 2 この授業に積極的に参加した	27,190	4.11	0.89
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	27,176	3.55	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	27,143	3.41	1.13
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	27,062	3.86	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	27,130	0.92	1.05
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	27,184	4.21	0.93
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	27,177	4.21	0.89
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	27,170	4.20	0.90
II 4 各回の授業内容は明確だった	27,159	4.23	0.88
II 5 十分な静粛性が保たれた	27,145	4.21	0.94
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	26,917	4.12	0.97
II 7 板書のしかたが適切だった	14,539	3.94	1.02
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	24,754	4.35	0.85
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	26,664	4.43	0.77
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	27,159	4.17	0.89
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	27,147	4.06	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	27,143	3.73	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	27,110	4.04	0.93
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	27,143	4.17	0.94
IV 2 授業全体の目標が明確だった	27,132	4.19	0.90
IV 3 学問的興味をかきたてられた	27,132	4.07	0.99
IV 4 この授業を受けて満足した	27,125	4.15	0.95
<b>V 学部等による設問</b>			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	23,779	4.24	1.01
V 2 この授業の受講者数は適切だった	23,761	4.25	0.93
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	23,655	4.28	0.91
V 4 【学びの精神のみ対象】この授業を通して高校と大学の学びの違いを感じた	6,389	4.19	0.94
V 5 【学びの精神のみ対象】この授業を通して大学の授業を受ける心構えができた	6,369	3.96	1.01
V 6 この授業の登録方法（次の中から選んでマークしてください）	—	—	—

⑤1 次抽選登録 ④2 次抽選登録 ③科目コード登録 ②その他 ①覚えていない

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0

表19 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
<b>I この授業へのあなたの取り組み方について…</b>			
I 1 授業全体を通じての出席率* <sub>1</sub>	1,748	94.70	9.95
I 2 この授業に積極的に参加した	1,746	4.30	0.80
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,745	3.73	0.98
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,746	3.60	1.06
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	1,739	3.84	0.99
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間* <sub>2</sub>	1,743	0.89	0.95
<b>II この授業の進め方は…</b>			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,747	4.48	0.78
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,747	4.35	0.82
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,747	4.36	0.82
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,743	4.41	0.80
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,746	4.55	0.71
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,739	4.36	0.84
II 7 板書のしかたが適切だった	1,231	4.16	0.91
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	1,556	4.44	0.79
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,715	4.56	0.68
<b>III この授業から得ることができたもの</b>			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,745	4.31	0.81
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,746	4.28	0.81
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,746	3.90	0.99
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,745	4.26	0.84
<b>IV 総合的にみて、この授業は…</b>			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,745	4.43	0.80
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,746	4.36	0.81
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,746	4.16	0.94
IV 4 この授業を受けて満足した	1,745	4.30	0.86

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

\*1) I 1 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:90%以上」=100、「4:70-89%」=80、「3:50-69%」=60、「2:30-49%」=40、「1:30%未満」=20

\*2) I 6 は回答項目を以下の数値に置き換え平均値を算出

「5:3時間以上」=3.5、「4:2-3時間」=2.5、「3:1-2時間」=1.5、「2:1時間未満」=0.5、「1:0時間」=0



## 2019年度「学生による授業評価アンケート」報告書

---

2020年9月発行

編集 立教大学 大学教育開発・支援センター

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>

e-mail [cdshe@rikkyo.ac.jp](mailto:cdshe@rikkyo.ac.jp)





